

醫
科
大
學
時
代

目次

一 緒 言	三二
二 草創時代	三三
三 整備時代	五一
四 戰爭時代	五六
五 終戰以後	五九

醫科大學時代

宮田

一

緒言

大正七年、時の原敬内閣は、第一次世界大戰後の世の趨勢に鑒み、其の政綱の一として高等教育機關の擴張を企圖した。よつて文相中橋徳五郎は、各界の經驗家、識者を網羅した教育審議會を設けて是に諮問し審議を盡さしめた。其の結果、先ず第一に新大學令の制定を見るに到つた。大正七年十二月六日附勅令第參百八拾八號を以て發布せられた大學令が是である。此大學令によつて、多年の宿望たりし單科大學の設立が始めて認容せられた。是に於て、京都・大阪・愛知・熊本の四公立醫學專門學校のうち、大正八年には大阪、九年には愛知が相次いで醫科大學に陞格、又、九年慶應義塾に醫科大學が新たに設置されることになり、こゝに始めて多年の懸案たりし醫育統一も實現の軌に乗つた。本校に於ても、此の世論の氣運到達に鑒み、組織を改めて醫科大學設立を企圖して之を發表した。一方、常に母校の發展を翹望して止まざる二千五百の校友は、時勢の推移に顧み、大正八年四月二日京都三條青年會館に會して校友大會を開き、各々其赤誠を吐露して茲に京都府立醫學專門學校陞格期成同盟會を組織し、委員を挙げ、宣言書を發

表して輿論の喚起に努めた。斯くて、校の内外相呼應して、文部省及本府當局者の了解を得るに努め、尙、府會議員を壓訪してその協賛を求めた。且、陞格期成同盟會は校友赤誠の結實たる釀金拾餘萬圓を以て、豫科及花園分院敷地六千八百九十六坪並に金數萬圓を寄附して陞格の熱意を披瀝し、本府當局も贊意を表し、九年十二月の府會に於て醫科大學設立の決議を見るに到り、内外の輿論是に一定した。是に於て、本校は新に百數拾萬圓の起債認可を受け、校舍・病院の内外に大改善及擴張を施し、更に上京區大將軍鷹司町に豫科並に花園分院の建設を企劃して、醫科大學設立の認可を政府に申請するに到つた。斯くて大正十年十月十九日文部省告示第四百七十一號を以て、大學令に據り其設立を認可せられた。青蓮院に呱呱の聲を擧げて以來、櫛風沐雨五十年、時に榮枯盛衰あり、幾多の難關を経て來たが、疊々と蓄積し來れる功績空しからずして、茲に、我國の最高學府の一員に列することを得たのは、歷代當局者の努力は云う迄もない事であるけれども、青蓮院以來の校友二千五百の母校を愛する赤誠の大きな賜であることを忘れてはならない。

爾來、最高學府たる大學の使命に徹し、醫學の研鑽と教育、人道への奉仕に、孜々として努むること此處に三十年、本學は今、創立八十年を迎えた。此三十年間に、其後半期には、吾國は明治革命以來始めての、而も比較にならぬ程大きな變改に遭遇して何もかにも一新した。此大きな變改の混亂裡に、貴重な資料の紛失、散佚、焼失等が伴つたのは残念な事であるが、出来るだけ正確に、此の三十年間の吾大學の歩いた道を辿つて見たいと思う。

記述の便宜上、此三十年を次の四期に大別して眺めたい。大別であるから各期末、期初の多少の出入は免れない事を諒せられたい。

第一期 草創時代

自大正十年十月
至大正十五年八月

第二期 整備時代

自大正十五年八月
至昭和十一年七月

第三期 戰爭時代

自昭和十一年七月
至昭和二十年八月

第四期 終戰以後

自昭和二十年九月
至昭和二十七年十一月

第一期は初代學長小川堯五郎の時代で、同氏の大學長就任より退職までを假に草創時代と名付ける。第二期は第二代學長淺山忠愛の就任より退職迄の期間で、假に整備時代とする。第三期は第三代學長角田隆の就任より第五代學長中村登の死去までを、一年のズレがあるけれども、日支事變の勃發から大東亞戰爭にかけて、無條件降伏の終戰まで大部分戰爭期間であつたから戰爭時代と假稱する。第四期は無條件降伏調印から八十年記念式迄、式當日には既に獨立を回復していたけれども、大部分主權を失つていたから終戰以後と一括假稱する。

第一期 草創時代

大正九年十二月の京都府會は京都府立醫學專門學校の陸格を是認し、之に要する一般豫算を協賛したので、本校は直に陸格認可申請に要する學則、設計其他の書類を整備し、大正十年一月廿六日府知事に提出した。府知事は之を文部省に申請した。斯くて其後は、陸格認可の指令が一日も早く來ることを待つのみとなつた。尤も、實施は大正十年

度の事業であり、豫科の授業實施も建設仕事の關係上、九月以後と最初から豫定してあつた事だが、七月になつても、いろ／＼な都合で肝心の教育審議會の議題に上らず、従前からの内報で九分通認可は確實と信じながらも、一同千秋の思で其の日を待つていた。一方内報に基き、既に募集を始めた入學志願者は日々増加してゆく。遂に暑中休暇期に入り、教育審議會も開かれず八月も空しく待望裡に過ぎて終つた。然し七月の其筋の内報により陸格確實の見込がついたので、取敢ず醫專豫科として豫定通り豫科の教育を開始する事となつて、醫專教授廣木多三（獨語）、同立入保太郎（化學）、同野村梅吉（獨語）に、新に鶴田多八（國語）、問田治郎吉（生物學）、永井種次郎（數學）の三名取敢ず醫專教授に任命され、八月既に醫專豫科講師を囑託された京都帝大講師岩井勝二郎（心理學）、立命館大學専門部及豫科教授宮田一（英語）等入つて教授陣を布き、一方、一千に近づいた入學志願者は、醫學専門學校豫科となつたため中學校四年修了者は受験不適格者となつて、中學五年を卒えた六百四十餘名の應募者につき選抜試験を行つて、百三名の入學を許可し之を一年生とし、同時に醫學専門學校第一學年修了の學生中より志望者を募り、試験の上二十五名を採用、之を以て二年級を編成した。豫科校舍建築完成する迄、講堂、解剖組織實習室、病理學實習室等を假教室として、大正十年九月十一日豫科第一學年、同第二學年の授業を開始したのである。

十月に入つて待望の陸格漸く實現した。十月十九日附文部省告示第四七一號を以て、慈惠會醫科大學と共に、大學令により京都府立醫科大學設立の件認可せられた。記者の記憶する處によると、當時の大阪毎日新聞の京都附録に、九月に開催された教育審議會の模様がほのかに洩らされている。それによると、審議の際いろ／＼質疑があつた中で、京都府立醫專の出身者の卒業後の業績如何の質問があつた際、審議會委員の一人、京都帝大總長荒木寅三郎が

「學位を得たる者既に十三名に達している」と述べたと云う。此十三名と云う數は、當時、官立五醫專卒業者の學位受領者數の何れをも凌駕する數であつたとの事である。十三名を少數なりと言うこと勿れ、當時の日本の學位受領者の最多數を占めてゐる醫學博士の總數すら、約八百名餘に過ぎなかつた時代の事である。荒木總長の此一言や、また、京都醫專の年間屍體解剖數も、陸格申請書提出迄、大正年間を通じて平均九二體強を示した事實、軍醫となつた卒業生の陸軍軍醫學校に於て示した優秀なる成績——恩賜賞に與つた者は一、二に止まらない——等々相須つて審議會の滿場一致の是認を招來したものと云えよう。



小川 璣 五 郎

京都府立醫科大學茲に實現し、學内はもとより學外校友の喜悅満足は言う迄もない。青蓮院時代の昔から、幾多の曲折浮沈を経験して來た吾學園の基礎是に由つて始めて固く、吾國最高學府の一として、洋々たる發展の途に就いた。名は既に得たり、これより期するは、唯、實の成就のみの決意、學の内外に溢れた。

正式の認可下るや、直に、醫專校長兼教授小川璣五郎、京都府立醫科大學長に任せられ、京都府立醫學專門學校長兼教授兼任を命ぜられた。

越えて、十一月一日、創立五十周年記念式並に陸格祝賀式が盛大に舉行せられた。來賓、卒業生等會する者一千二百餘名、頗る盛儀を極め、祝賀の行事夜に及ぶ。當日二十年以上の勤續者十二名の表頌が行われた。

尙、創立五十周年記念式典の儀天聽に達し、國母陛下（貞明皇后）より御内帑金の御下賜があつた。

當日は、午前中多少危ぶまれた天候も次第に晴れ渡り、夜に入つてからは美しい星空となり、全く恵まれたる式日であつた。尙、大阪の第四師團の陸軍軍樂隊が特に來學して學式及び饗宴に協力した。

京都府知事若林資藏の告辭を始め、文部大臣中橋徳五郎の祝辭（専門學務局長松浦鎮治郎代讀）、京大總長荒木寅三郎、京都府會議長木戸豊吉、京都府知事在任中陞格に盡力した京都市長馬淵銳太郎、京都府醫師會長松浦有志太郎、本校卒業生總代高田晁安、學生總代中澤龜太郎、其他卒業生數氏の祝辭あり、祝電祝文は約百通に及ぶ。多くの祝辭中、京大荒木總長の祝辭と卒業生總代高田晁安の祝辭とは、他の祝辭とは稍異色ある様に感ぜられるので、茲に煩を厭わず、小川學長の式辭と共に再録する事にする。

式 辭

茲ニ本校院ノ創立五十年ヲ記念シ兼ネテ本校陞格ノ祝典ヲ舉ケルニ當リ朝野來賓ノ貴臨ヲ辱ウシテ無限ノ光榮ヲ荷ヒタルハ不肖嗟五郎ノ欽佩ニ堪エサル所ナリ

本校院五十年ノ經歷ヲ顧ルニ明治五年ノ草創ヨリ今次陞格ノ達成ニ至ルマテ實ニ艱難ニ始リテ辛苦ニ終リ殊ニ中間幾多ノ難關ニ逢ヒ殆ト廢罷ノ已ム可カラサル苦境ニ入ルコト一再ニ止マラサリシモ幸ニ歷任ノ校院長以下教職各員衆心一意、終始一貫、百難ヲ排シ萬苦ヲ忍ビ只管心力ヲ前途ノ進展ニ注カレタルニ賴リ教學ノ功、醫治ノ績、日ヲ逐フテ愈々著ハレ自營ノ計、獨立ノ圖、年ト共ニ固キヲ加ヘ明治十三年ニ竣工セル新築校院モ幾ハクナラスシテ擴大ノ必需ヲ致シ大正三年ニ落成セル増建校院モ更ニ推廣ヲ加フルニ非スンハ逐年増進スル就學就療ノ希望ヲ嘗ル、ニ由ナキノ現況ニ在リ、之ト同時ニ職員ノ學德、治術ノ精到、隱然重キヲ斯界ニ持シテ翕然遠近ノ輿望ヲ集ムルノミナラス前後成業セル二千五百餘名ノ多士ハ全國各地ニ蕃布シ播テ海外各處ニ及ビ各自専門ノ研究ニ潛心スルニ非レハ即チ本分ノ實行ニ從事シ均シク母校ノ先進ト一氣呼應シテ學界世道ニ貢獻スルヲ怠ラス、此固ヨリ校院五十年ノ梗概ニ

過キスト雖モ而モ今次陞格ノ基準ト爲リ根柢ト爲リタルモノハ蓋此歴史ノ結晶ニ外ナラサルカ故ニ茲ニ歷任諸先輩ノ盛德偉功ニ對シテ恭シク滿腔ノ敬意ヲ表スルト同時ニ校院ノ護持、陞格ノ達成ニ多大ノ鼎力ヲ添ヘラレタル府當局諸官、校友諸彦及ヒ現任教職各員並ニ翼賛ノ誠意ヲ致サレタル府民諸君ニ對シテ謹テ衷心ノ謝悃ヲ呈セントス

更ニ本日ノ式典ニ就テ懽喜交々至ルヲ禁セサルモノアリ 曩ニ西南ノ役 先帝陛下ノ御駐蹕ニ當リ特ニ 御名代トシテ二品熾仁親王殿下ノ御差遣アリ 尋テ新築落成スルヤ又モ 御名代二品貞愛親王殿下ノ臺臨アリ 其都度優渥ナル上旨多大ナル金品ノ恩賜ヲ辱ウシ今又五十年記念ノ祝典ヲ開召サレ 國母陛下ヨリ御內帑金ノ恩賞ヲ拜受シ層次ノ渥恩無上ノ寵光如何ニシテ其萬一ニ奉答ス可キヤ是實ニ微臣ノ恐懼措ク能ハサル所且今陞格ノ基址甫メテ定マリ立學ノ經營纔ニ成レリト雖モ其內ヲ充實シ實質ヲ向上シテ内外先進ノ諸大學ト肩ヲ並ヘテ立ツヲ得セシメ其規模ヲ完成シ設備ヲ整頓シテ最高學府ノ體用全スルヲ得セシムルハ寔ニ至難ノ事業至重ノ負荷ニ屬シ不肖自ラ篤鈍ニ策チ夙夜奮勵身ヲ以テ萬維ノ衝ニ當ルヲ辭セスト雖モ才疎ニシテ力微ナリ 必スヤ常ニ先進諸大學ノ指謨ヲ仰キ同僚諸賢ノ勸襄ヲ賴ハシ尙ホ府市有力有思ノ聲援義助ヲ待ツニ非スンハ大業ノ成就重寄ノ負擔深ク失墜アラントヲ恐ル 是又不肖ノ焦憂措ク能ハサル所切ニ希ハクハ滿堂光臨ノ各位並ニ大方有道ノ士君子特ニ鄙人ノ心事ヲ體諒セラレ相率キテ其不逮ヲ匡濟シ其不給ヲ周全シ以テ本學ヲシテ形神兩ナカラ充テ文質俱ニ備ハリ仰キ 皇家渥恩ノ涓埃ニ答ヘ俯シ陞格榮名ノ玷辱ヲ免レシメラレンコト感激懇欸ノ至リニ任ヘス 敢テ蕪穢ナル式辭ヲ修メ恭シク各位ノ鈞安ヲ頌シ併セテ鄙衷ノ俯鑒ヲ祈ル

大正十年十一月一月

京都府立醫科大學長 正五位 小川 璣 五郎

祝 辭

京都府立醫科大學ハ維新日淺ク百度草創ノ際病院一隅ノ學寮ニ濫觴シテヨリ累進シテ甲種醫學學校ト爲リ專門學校ト爲リ歷年五十造士三千達ニ全國學ノ華ヨリ拔キテ陞格ノ榮典ニ膺ルニ至此固ヨリ舉學一致悉心努力ノ功ニ由ルト雖モ而モ其既往五十年ノ閱歷勲業ニ

負フ所亦甚大ナラストセス 茲ニ階格ノ祝典ヲ以テ五十年ノ光榮ヲ記念セラル、ハ良ニ以アルナリ

抑階格ニ貴フ所ハ其名ヲ襲フニ在ラスシテ其實ヲ充スニ在リ 蓋シ大學ハ研究ヲ生命トシ修養ヲ本能トス 唯夫レ理義ノ研究ヲ積ミ智德ノ修養ヲ累ネ學界ニ嘉惠シ世道ニ裨益シテ始テ名實相負カスト謂フ可シ 竊ニ當大學ノ情形ヲ觀ルニ設備完カラサルニハ非ス 資源深カラサルニハ非ス人物備ハラサルニハ非ス 獨リ生命本能ニ於テ愚昧タ其内外諸大學ニ比シテ遜色ナキヤ否ヤヲ知ラス 儼シ或ハ徒ニ階格ノ美名ニ溺レテ其實ヲ充スヲ怠或ハ偏ニ大學ノ形貌ヲ重シテ其生命本能ヲ忽忘スルカ如キアラハ啻ニ階格認可ノ本旨ニ辜負スルノミナラス既往五十年ノ功績榮譽焉ソ一朝水泡ニ歸スルナキヲ得ンヤ 切ニ希ハクハ當事ノ諸賢舉學一氣其ノ生命ヲ存養シ其本能ヲ擴充シテ内外先進ノ諸大學ニ凌駕スルヲ致シ以テ後五十年ノ勳名ヲシテ前五十年ノ光榮ニ百千倍セシメラレンコト誠ニ懇欸ノ至ニ任エス 敢テ滿腔ノ積愾ヲ鳴ラシ以テ盛典ノ祝辭ニ充ツ

大正十年十一月一日

京都帝國大學總長 荒木寅三郎

祝 詞

尊敬スル京都府立醫科大學長閣下！

予ハ既往ニ於ケル御校出身者ヲ代表シテ祝詞ヲ呈スルノ光榮ヲ有ス 御校力創立第五十年ニ昇格シテ大學トナリシヲ吾等一同ノ祝賀スルコト熱烈ヲ極ム

抑モ御校ハ既ニ明治元年ニ其種子ヲ投セラレ同五年ニ雙葉ヲ萌サシ同十二年乃至十五年京都府醫學校トシテ殆ト東大醫學部ト比肩セントスル勢ナリシニ府立トナリテヨリ經費ヲ制限サレ又前日ノ如クナルヲ得ス 當時ノ在校者ハ悲嘆ニ堪ヘサリキ 然レ共御校ハ邦人良師ヲ聘シ甲種醫學校トシテ尙ホ第一流ニ位シ次テ醫專學校トシテ今年ニ及ヒ而シテ至仁ナルノ攝理ト閣下及校外諸君ノ熱誠ナル努力ニ依リ一躍シテ最高學府トナレリ 吾等如何テ大ニ祝賀セサルヲ得ンヤ

殊ニ御校ハ初期ニハ帝國朝野ノ寵兒トシテ前途大ニ嚆望セラレ畏クモ明治大帝陛下ノ親臨獎勵ナシ給ヒシ事サヘ有ルニ中途大學ニ遠サカリ又別ニ帝大ヲ同地ニ置カレ御校ノ良師ヲ拔イテ之ニ移サレシカ如キ又後進ノ醫專ニ昇格ヲ先ンセラレシカ如キ又醫育統一上醫專ノ前途憂々タリシカ如キ何レモ御校關係者ヲ刺激シ奮發興起セシメタリ 而シテ今ヤ幸ニシテ古ニ歸リ大學ノ資格ヲ公認セラレ又 皇后陛下ヨリ畏クモ御下賜金ノ特恩ヲ被ルニ至ル 吾等ノ祝賀ノ熱烈ナルモ亦宜ナラスヤ

然レ共最高學府タル御校ノ任務ハ實ニ重大ナリ 其設備完全セサル可ラス其功績多大ナラサル可ラス 希クハ常ニ勵精シテ他諸大學ト相競ヒ相助ケ以テ共ニ進達シ而シテ世界ノ模範的大學ト成リ又大ニ病魔ヲ驅除シテ人性ヲ安泰ナラシメヨ

大正十年十一月一日

本校卒業生總代

醫學博士 高 田 畊 安

從來、吾學園の記念日は四月十六日と定められていたが、此日は記錄に徴するも之を記念日とする根據は十分なりとは言えないので、今回陞格を好機に、十一月一日、即ち吾學園の歴史にも明らかな様に、明治五年（1868）青蓮院（舊栗田宮跡）に京都府假病院が創設せられ、醫學教授所が設立せられた日、則ち吾學園發祥の日を以て記念日とする事になつた。

十二月に入り、醫專教授廣木多三、立入保太郎、野村梅吉の三名は、京都府立醫科大學豫科教授兼醫專教授に、醫專教授鶴田多八、門田治郎吉、永井種次郎の三名は京都府立醫科大學豫科教授に、醫專幹事中道貫一は大學幹事に任ぜられ、豫科教授廣木多三は豫科主任事に補せられて、京都府立醫學專門學校豫科第一學年・第二學年と呼ばれていた生徒も、陞格と同時に、茲に芽出度京都府立醫科大學豫科第一學年・第二學年となつて、名實俱に大學の陣容を整え

て出發する事になつた。



廣 木 多 三

當時の豫科の學科課程は、官立高等學校理科のそれに準據したものであるが、唯本學豫科では圖畫を省き、第三外國語として佛語每週一時間を容れ、獨逸語、英語と共にこれを必修科目とした。又、自然科學界進歩の趨勢に照應して、動物學、植物學の別を排して、學界に固く地歩を樹立して來た生物學をとり、地質學・礦物學は、本學の性質に鑒みこれを礦泉學とした。これらは當時の他の同種學校に比し聊か異色ある點であつた。當時、記者が廣木主事より直接聞知した所によれば、陸格計畫立案の際、單科醫科大學として一貫した教育の立場から、基礎醫學の一部をば豫科の高學年に於て實施の聲さえあつたが、吾國の文化未だ熟せず、時機尙早とあつて、此の案は日の目を見ずに終つたとの事である。又、多大な希望をかけて設置した第三外國語、佛蘭西語も、當時の吾國の文化の水準は高等學校中でも佛語をおける處は五指に滿たず、京都帝國大學文學部にさえ未だ佛文學講座のなかつた時代のこと故、佛語の重要性の認識未だ十分ならず、教える側（第三高等學校教授の兼任）にも、亦、週に僅々一時間學ぶ側にも不可避的支障多く、折角時代の先端を切り、遠大なる抱負を負荷した此第三外國語も所期に副い兼ねる様になつたので、後に生物學、數學の時數増加をする際に廢止することになつて、大正十三年度の學年を以て終末を告げるに到つたのは遺憾な事であつた。

豫科の學年は、開設當初の時期の關係上、九月を以て學年の始期としたが、既に官立の諸學校始め全國の多くの學

校は學年の始期を四月に變更し、着々其の實施を見つつある趨勢に鑑み、且、本科との聯絡の上からも考慮せられた結果、本學に於ても、學年の始期を四月とする事に改められた。是がため、在學の第一學年・第二學年の學年短縮を行ふ事になり、豫科では年末年始の四日間を除き冬期休業を廢して講義を行い、且、日々の授業時數を増加するなど、臨時講師を囑託したりして、所定の授業時數を補充し完了した。

大正十一年二月、醫專豫科講師宮田一（英語）、京大講師紫久光（物理）、豫科教授に任せられ、越えて三月には、豫科教授門田治郎吉（生物學）病氣のため死亡、代つて箕浦忠愛が生物學を受持つ事になつた。門田教授は東大に於て動物學を、北大に於て木原均教授等と共に植物學を専攻した篤學の士で、本學に於ても氏に期待する處多大なものがあつたのであるが、在任一年に滿たずして逝去したのは返す／＼も遺憾な事である。同月、大谷大學教授榎本安三郎が豫科教授（獨語）に新任せられた。

三月末、三日間に亘つて、陞格後最初の入學試験が行われた。昨秋は、既述の如く、入學試験實施當時はまだ陞格していなかったもので、中學四年修了者は受験出来なかつたが、今回は正規の大學令に基く入學試験の事とて、中學四年修了以上の者雲集し、採用人員八〇名に對し應募者數實に一四六六名に達した。斯くて四月よりは、豫科に於ては第一・二・三學年共茲に完備し、一方、教授陣にも、既に醫專豫科講師を囑託せられていた岩井勝二郎（心理學）は豫科講師となり、新たに京都地方裁判所判事大飼吉備雄（法制經濟）、第三高等學校講師河野與一（佛語）、京大講師東光治（生物學）等前後して豫科講師を囑託せられた。後に判事山口友吉、大飼に代り、第三高等學校教授松井知時が河野に代り、養内收が東光治に代つた。物理學、化學、鑛泉學（後に鑛物地質學となる）等の教室にも講師が囑託

せられたのは、ずっと後の事である。

斯くて一應陣容も整い、今は花園に新築中の校舎の竣工を待つのみとなつた。

大正十一年五月、待望の豫科校舎落成した。直に木の香も新たな大將軍鷗司町の新校舎に移轉して授業を開始した。此時より昭和廿六年三月廢校となる迄、幸に祝融にも見舞われる事なく、年々歳々、數十乃至壹百有餘の青年をこゝに迎えては送り、送りては新たに又迎えてはぐくみつゝ、豫科の使命を完了した此校舎は、校友の真心の結晶たる六八九六坪餘の土地の西側を占め、建坪八〇九・八七、延坪一〇四四・八七、總工費一六六、三三〇圓を要した。本學の母胎醫專と療病院が、北に紅の森を扣えて東北に靈峰比叡を仰ぐ形勝の地を占むるに比し、是は、西に由緒ある双ヶ丘、北に衣笠山を扣えて遠く名峰愛宕を仰ぐ之亦形勝の地に、當時は見渡す限り青疊の裡に、忽然として二階建一棟、平屋二棟の吾學園の出現を見たのである。

茲に、校章「橋」の制定に就いて是非一言して置かねばならない。大正十年九月醫專豫科として發足した當時は、MSを組合せた京都府立醫學專門學校の校章に白線二條を卷いて、わずかに新銳の意氣を象徴していたが、在校の一・二年百五十名の生徒諸君は勿論、教授側にも割切れないものがあつた。既に階格實現を見たる今日、校章制定は一日も早くとの氣運が盛り上り、生徒間にも、「我々の校章は我々の手で」と云う氣運が何時とはなしに醸成されて來た。豫科の教授會でも全面的に此の氣運に同調し、大學當局の諒解の下に校章の圖案を生徒より募集する事に決定、豫科主事廣木教授から此旨發表せられ、直に實行に着手した。熱烈に待望して居ただけに殆ど全生徒が應募し、間もなく多數の作品が集つた。優秀な作品の象徴するテーマは、期せずして二つの主流——後に正式に校章と選定された橋を基調したものと、鳳凰を基調したものとに分れた。

我學園は、もと／＼皇宮、大宮御所に近く、靜寂にして清楚な此の邊り一帯の風物は、學生がこよなく愛し親しんできたところ、その所謂御所御苑にゆかり淺からぬ橘と鳳凰とが最後の議題に上り、慎重眞摯な論議の末、遂に當時豫科一年に在學して居た兒玉邦男（昭和三年本學卒業、解剖學教室に入り助教になつた）の、橘の實と花と葉とを配したものが當選した。これが當時の京都高等工藝學校圖案科の本野精吾教授の手によつて技術的に多少の修正を加えられて、素朴の裡に而も優雅な氣品の籠つた、醫大豫科にふさわしい我校章が出来上つたのである。待望久しい生徒一同の欣喜雀躍した事は勿論である。「我等の手」で作つた校章を、早速、帽子につけて洛中洛外を闊歩する様になつた。我々若き教授達をはがゆがらした創設當初の生徒諸君の遠慮勝な氣風は、此校章の制定により、運動場らしい運動場こそなかつたが、新校舎の竣工も手傳つて次第に消え、東、「紅もゆる」と高唱する三高生徒に對し、西、双陵健兒こゝにありの意氣高く、潑刺たる青年學徒の氣風を始めて見る事が出来た。

斯くの如く、當時は異例な最も民主的な方法によつて、全生徒の總意により選定された校章の基調に「橘」が擧げられた事に就いては、當時第三高等學校の校章が「櫻」であつたのに對し、生徒間に多分に潜在していた對抗意識から、本學のすぐ近くの御所紫宸殿の庭の「左近の櫻」に對し、「右近の橘」にあやかつて意義をもたしたのだと、簡単に片付けてはいけなない。かゝる單に感傷的觀點からのみきいてゐるのではない。支那の故事によれば、橘は醫學醫術に大いなる關係を有つてゐる。其醫學を教え、醫術を授ける本學の意圖を巧妙に表現してゐると云ふ點に意義があるのである。

此の支那の故事について、鶴田豫科教授は特に委しい考證をして吾々に示教せられた。當時記者が手記して置いたものによつて要領を略記する。尙、當時の新聞紙にも新校章紹介の記事中に、鶴田教授が語された此要領を載せたものがあつたから、記憶せられてゐる讀者もあらうと思う。

錦字箋に「晋の時、江淮間の人、疫を患う。蘇耽橘を植え、井を穿ち、疫むものをして橘葉を食ひ水を飲ましめ、輒ち癒ゆ」と。又、神仙傳や類書纂にも此事は言われていて、古來「橘井」の語を以て醫家を表示している。又、中國では、橘の花の香ぐわしきを

以て文に例え、棘を具備し、木の強固なのによつて武を妻わしている處から、一面には橋井を偲ばしめ、一面には葉と實によつて文武兩道を發露せしめ、其沈着にして謙遜なる精神を以て成功の實を結ぶ事を發揮せしめているのであると。

此の際、あの深緑色のスクール・カラー（校色）に就いても一言しておきたい。校章が決定されると、誰から言ひだしたともなく、スクール・カラーを選定しようとする聲があがつた。遂に生徒一同の輿論となつて、一同が自主的にいろいろ協議の結果、これも、柑橘類の果實が成熟する前の色、あの深緑色が選定され、其の頃から行われた愛知醫大豫科との對抗競技（この對抗競技は、愛知醫大が名古屋大學醫學部となり豫科が廢止になる迄年々續き、其後は對慈惠醫大戦になつたが）には、應援團の幟や手旗等に用いられ、夏の寒帯帽子のリボンにも二本の白線入りの深緑色が用いられた。

大正十一年七月に入り、豫科校舎の東側に新築中の本學附屬醫院の分院落成し、花園分院と稱し、主として精神神經病患者を收容し、醫專教授野田浦弼、分院長となつて開院した。建坪一一七七・〇六、延坪一二〇六・八一二、二階建一棟、其の他平屋建附屬建物共總工費一八一、六一〇圓を要し、患者收容數二百餘名、近畿隨一の新式の設備と收容數を有する精神病院と目せられた。

八月、去る三月より、故門田治郎吉の跡を襲け生物學を受持つて來た豫科講師箕浦忠愛、豫科教授に任ぜらる。

越えて九月廿四日、丁度休日に當つていたが、午後十時頃、大學講堂（明治四十一年に建築された木造二階建六〇坪餘）の階上東北隅の電氣スイッチから突如發火、木造建築物の事として火はたちまち全館を包み、加うるに夜間の事として消火に困難したが、教授、醫員、學生等、消防夫に協力して消火に努めた結果、約一時間で鎮火した。猛烈なる火焰は、東に隣接している解剖教室にも及ぼんとする勢であつた。又入院患者を案ずる見舞人の殺到で非常なる混亂

を見たが、解剖教室への延焼もなく、重要書類は全部無事、負傷者も消防夫中に數人あつたのみに止つたのは不幸中の幸とも言ふべく、火災の原因は漏電と云う事であつた。

十月一日には、恒例の解剖體大法會並に物故職員看護婦の追悼會が本派本願寺に於て施行せられた。通算第二十二回になるが、本學陞格後今回が最初の法會である。尙、大日山で行われる春季解剖體法會は例年五月十四日に、秋季本派本願寺に於て行われる此の大法會並に追悼會は十月一日にと、今後も年々變りなく施行せらるる事恒例である。

十一月一日、創立記念日の佳き日を卜して、豫科開校並に花園分院開院の祝賀式典を舉行した。附近の家々の軒はもとより、庭の松樹の枝にまで紅提灯がつられてあつたりして、祝賀氣分は附近一帯に漲つていた。式は百餘の來賓及び全生徒の列席の裡に、學長の挨拶につゞいて、池松府知事の告辭、荒木京大總長・馬淵京都市長・池田府會議長・小笠原同窓生代表・檜原醫專學生代表・山口生徒代表等の祝辭朗讀の後、一井府技師の工業報告などあつて、再び學長の謝辭を以て終了、午後より一般に開放、餘興・飾物等を公開した。餘興の部では、活動寫眞（映画と云う言葉がまだ今日程我々の日常生活にピッタリしない時代の事で、トキー末だ表われず、わずかに寫眞と實演とをつないだ連鎖劇が新機軸と目された時代の事だ）と、演劇部とが壓倒的に人氣を博し、辯士も役者も玄人はだして、觀る人々のうちから「アレほんまに生徒さんですか」の聲を聞かれた程である。飾物では、豫科本館の前庭に豫科三年級が築造した、高さ二十尺、徑十八尺の偉大なる觸髅が先ず門を入る人々の心膽を奪つた。一年級の「天國と地獄」では、生きた人間其物が飾りになつて出たので、狀景眞に迫り、地獄の恐しさに泣き出す見物人も出た程である。

尙、式典終了後直に、豫科本館と第一校舎との間に新たに築造した土俵の土俵開きを兼ねて、學内相撲大會が開か

れ、校舎裏の校庭では學内相撲大會終了の後、午後から京都全市小學校兒童の相撲大會が催されるなど、終日盛況を極めた。

夜は、全生徒、折柄雨になつた夜空を、紅提灯をかざし、大太鼓打ちならし、逍遙歌「紫雲の裳」を口ずさみ、衝天の意氣高く、青春を漲らして、長蛇の列をなして校門より順路東して本學に到り、御苑に入り、建禮門前にて萬歳を三唱した。

尚、校内觀覽、催物等は、前夜の雨はれて前日に勝る秋日和となつた翌二日にも亦行われ、前日に劣らぬ盛況を呈した。兩日共、校舎の西側に設けられた模擬店も上々の繁昌にて、祝典は十二分の歡を盡して終了した。

大正十二年に入り、二月、學長小川瑤五郎、大學教授兼任を命ぜられて内科第一部長となり、同月、京都帝國大學教授淺山忠愛、京都府立醫科大學教授に任ぜられ内科學擔當、同科第二部長を命ぜられた。

三月に入り、醫專教授三浦操一郎（小兒科學）、同吉川順治（胃腸科學）、同角田隆（病理學）、同河村叶一（外科學）、同島田吉三郎（解剖學）、同加治安信（産科婦人科學）、同越智眞逸（生理學）、同増田隆（眼科學）、同常岡良三（衛生微生物學）、同本永七三郎（齒科學）、同中村登（耳鼻咽喉科學）、同鈴木正次（外科學）、同梅原信正（病理學）、同野田浦弼（神經精神科學）、同中川清（皮膚泌尿器科學）、何れも京都府立醫科大學教授に任ぜられ、臨床方面の諸氏はそれ／＼附屬醫院の擔當の科の部長を命ぜられた。但、河村教授は外科第一部長に、鈴木教授は同第二部長を命ぜられた。又、醫專教授松永周三郎（内科學）、醫專助教授齋藤二郎（小兒科學）は、京都府立醫科大學助教授に任ぜられ、教授角田隆は京都府立醫科大學學生監兼任を命ぜられた。又、同月 藥學士吉峯時之輔（鑛泉學・

分析學) 豫科教授に任ぜられた。

四月、東北帝國大學助教授藤井猪十郎、本學助教授に任ぜられ、藥物學を擔當することになった。豫科には、後年、それ〴〵學界に雄飛した新進氣鋭の青年學徒、文學士高坂正顯(倫理及獨逸語)並に勝義孝(生物學)が、豫科講師となつて教壇に立つた。

此月十六日、小川學長以下各教授參列の下に、本學開學式——正式には——大學本科學生入學宣誓式が嚴肅に舉行せられた。豫科の新人學者の入學宣誓式も同時に舉行せられた。本科豫科の學生生徒の入學宣誓式は、其後永く同日同時に行われた。陸格以來、當事者の努力空しからず、一應形體整い 内容漸く充實し來り、此新學年には豫科修了生徒始めて本科に進學し、茲に大學の實體成立して陸格の實を現わした。當日、小川學長が、豫科修了生二十名に、醫專卒業生の志願者中より選拔せる二十名、併せて四十名の新人學生の前に朗讀せられた開學宣言書は、本學の抱負及び期するところを述べて餘蘊なく、極めて意義深きものがあると信ずるから、全文を茲にあげて記憶を新たにしたいと思う。

尙、開學式には、多くの來賓、校友を招待して盛大なる祝典を舉げる筈であつたが、前年焼失したる講堂の再築未だ完成せず、式場に充つべき場所もなき儘に、學内の學式に止つた。

開學式宣言

此次本學新任ノ教育、初人ノ學生ヲ迎ヘテ如實ニ大學ノ形體ヲ具ヘ茲ニ本日ヲ以テ開學ノ式典ヲ舉クルハ吾人無量ノ感慨ニ堪ヘサル所ナリ

本學創設以來吾人ハ形體ノ整頓、内容ノ充實ニ拮据經營惟日モ足ラス 幸ニ諸般ノ施設略ホ豫期ノ程限ニ達シ就中圖書校具等ノ設備ノ如キ當初當局ノ認可ヲ經タル數額ヲ超過セル者アルハ頗ル快心ノ事ニ屬ス 而モ吾人本來ノ理想ニ比スレハ形體ニ於テモ内容ニ於テモ尙多大ノ距離アルヲ免レス 殊ニ昨秋ノ火災ニ講堂ヲ燒失シ爾後直ニ再建ヲ設計シテ其規制ヲ擴メ以テ大學講堂タルニ愧チザラシメンコトヲ期セシモ時日尙淺ク工程未タ進マス 今日之ヲ以テ舉式ノ光彩ヲ添ヘ得ルニ至ラサルハ吾人ノ尤モ遺憾トスル所ナリ 然リト雖モ形體ノ整頓モ内容ノ充實モ詮シ來レハ使命ヲ遂行スル所以ノ設備ニ過キス 要スルニ使命ハ主ニシテ設備ハ從ナリ 故ニ茲ニ本學ノ使命ト之ニ對スル吾人ノ覺悟ヲ略叙シテ學生諸子ノ奮勵ヲ促シ兼ネテ大方ノ諒察ヲ仰カント歛ス 本學ノ使命ハ大學令第一條ノ旨趣ニ遵ヒ醫學醫術ヲ教習シテ其蘊奧ヲ研究シ且學生ノ品性ヲ陶冶シテ才德兼具ノ人格ヲ養成スルニ在リ 今便宜上學術ノ教習及ヒ研究、人格ノ修養、實地ノ練習ノ數項ト爲シテ之ヲ分述セン

學術ノ教習

學術ノ教習ハ各學通有ノ本務ニシテ獨リ本學ノミノ使命ニアラサルコト絮說ヲ待タス 唯本學ノ如キ醫學醫術ヲ專攻スル者ニ在テハ教學ノ領域頗ル深廣ニシテ凡ソ各種ノ基礎學ヨリ各般ノ術科ニ至ルマテ其最モ進歩セル理論及ヒ應用ノ智識ハ一應教習シテ遺スナキヲ要ス 此レ本學カ他科大學ノ撰ニ異ナリ四學年ヲ成業期トシ此程限ニ準シテ諸般ノ設備ヲ施ス所以ナリ

抑醫學醫術ハ終身ノ學術ニシテ歲月ノ限課ス可キ所ニアラス 殊ニ深遠ナル蘊奧ノ計尋、精微ナル應用ノ妙技ニ至テハ必ス各人畢生ノ研修ニ需ツ可ク到底數學年ノ教習ヲ以テ大成ス可キニアラサルカ故ニ各科ノ教習ニ於テハ務メテ學生ノ趣味ヲ養ヒ其理論及ヒ應用ニ對シテ不盡ノ感興ヲ催カシ其卒業後小成ニ安スルコトナク必ス進ンテ専門ノ研究ニ沈潜スルノ素地ヲ作ラシムルヲ要ス 此レ特ニ教官ノ善導ト學生ノ樂進ニ囑望シテ措カサル所ナリ

學術ノ研究

學術ノ研究ハ大學ノ生命ニシテ其消長ハ以テ當該大學ノ價值ヲ斷スルニ足ル 今ヤ本邦ノ醫學ハ漸ク泰西模倣ノ陋態ヲ脱シテ將ニ獨

創自發ノ新境ニ入ラントス 曩ニ新大學令ノ發布カ醫育統一ノ機運ヲ促セシヤ各地ノ專門醫學先ヲ爭ツテ大學ノ創設ニ躍進シ來リ斯界ノ天地茲ニ一新生面ヲ開カントス 是時ニ方リテ最高醫育ノ重擔ヲ分ツ者爭テカ研究發明ノ美績ヲ舉ケテ一代ノ機運ニ應スル所以ヲ圖ラスシテ可ナランヤ

研究ノ目的ハ學術ノ繙奧ヲ究メテ前人未發ノ眞理ヲ闡明シ若クハ前代未聞ノ新方ヲ發見シテ學界ニ貢獻シ人生ニ裨益スルニ在リ其事タル極メテ崇高ニシテ其旨趣タル至テ純眞ナリ 事極メテ崇高ナルカ故ニ鞏固ナル基礎ヲ要ス 各種基礎學ノ學習、各藝術科ノ練熟ハ研究ノ基礎ヲ鞏固ニスル所以ナリ 旨趣至テ純眞ナルカ故ニ外物ノ汚染ヲ許サス 名譽ノ爲メニ研究ヲ爲スハ名聞ノ汚染ナリ利達ノ爲メニ研究ヲ爲スハ利慾ノ汚染ナリ時好ニ投シテ研究ヲ爲スハ流俗ノ汚染ナリ輿論ニ媚ヒテ研究ヲ爲スハ阿世ノ汚染ナリ一念汚染ニ觸ルレハ頭腦忽チ透明ヲ欠キ志氣即チ堅忍ヲ失フ 之ヲ以テ至深ナル學術ノ繙奧ヲ究メ至難ナル獨創ノ發明ヲ爲サント欲スルハ誠ニ木ニ緣リ魚ヲ求ムルヨリ難シ 戒メサル可ケンヤ

研究ノ方法ハ觀察實驗ノ二途ニ外ナラス 凡ソ學者、事物ノ真相ヲ知ルハ専ラ觀察ノ力ニ賴ル 而モ觀察ノ結果ヲ勘檢シテ其精粗當否ヲ明ニスルハ乃チ實驗ノ功ニ由ル 醫學上ノ研究ハ生物ノ自然原理ヲ對象トシ胎生ノ神秘ヨリ人生發育ノ源流ヲ尋ネ單細胞ノ生體ヨリ複雜ナル高等動物ノ生活ニ及フ 故ニ一見些細ニ類スルノ事理モ必ス細心ノ觀察ヲ加ヘテ忽略ニ付セサルヲ要ス 由來破天荒ノ大發見ハ往往端ヲ偶然ノ事爲ニ發ス 而モ平生事物ノ觀察ニ忠實細心ナルニアラスンハ偶然ノ事爲ニ天藏ノ秘鑰ヲ握ル能ハス 須ラク知ルヘシ發明ノ美績ハ忠實細心ナル觀察ノ賜ニシテ決シテ投機者流ノ僥倖ノ成功ニアラサルコトヲ

實驗ハ獨リ自己ノ觀察ヲ勘檢ス可キノミナラス又以テ前人ノ所見、先進ノ所說ヲ檢證シテ其當否ヲ判知ス可シ 凡ソ科學ニハ一定不變ノ學說ナシ 科學ノ最高權威ハ實驗ニシテ研究ノ歸趣ハ實驗ニ存ス 吾人カ本學ノ設備ニ於テ輪奐ノ美觀ヲ後ニシテ實驗室ノ整頓ヲ先ニシタルハ實ニ是カ爲メナリ 唯其設備ヲシテ實効ヲ奏セシムルハ人ニ在リテ物ニ在ラス 研究者常ニ純眞忠實ノ心ヲ以テ其事ニ從ヒ終始不盡ノ興味ヲ以テ其天分ヲ盡クスニアラスンハ如何ニ整頓セル設備アルモ竟ニ優秀ナル業績ヲ舉グル能ハス 是レ指導ニ

任スル者ノ尤モ心思ヲ注ク可キ所ニシテ夫ノ獨逸醫學隆興ノ原由カ主トシテ是ニ在ルハ識者ノ共ニ認了スル所ナリ 顧フニ研究者ノ資質好尚ハ人々必シモ同一ナラス 而シテ資質ニ適セサル研究ハ天分ヲ盡クサス好尚ニ合セサル問題ハ興味ヲ生セス 之カ指導ニ任スル者放漫ニシテ主張ヲ示サス茫漠トシテ指針ヲ授ケサルハ固ヨリ不可ナリト雖モ而モ偏狹ナル獨斷ヲ以テ黨同伐異ノ風氣ヲ鼓吹スルカ如キハ尤モ不可ナリ 必須ラク各人ヲシテ天分ノ長スル所、興味ノ生スル所ニ向テ才力ヲ展ヘシメ時ニ或ハ怪僻奇矯ノ說ヲ立ツルモ必ス冷靜ニ聽テ公平ニ判シ其可ナルハ之ヲ披進シ不可ナルハ之ヲ匡正シ務メテ研究ノ趣味ヲ培植シ天分ノ發揮ヲ啓導シテ實驗ノ大成ヲ樂マシムルヲ要ス 吾人ハ敢テ天才の研究ニ由リテ驚天動地ノ奇功ヲ奏スルヲ望マス 唯望ム所ハ常ニ自然ノ現象ヲ師トシテ着實ニ實驗ノ步武ヲ進メ日就月將ノ功ヲ累ネテ穩健精當ノ業績ヲ收ムルニ在ルノミ

人格ノ修養

人格ノ修養ハ學術ノ習修ト表裏ヲ相爲シ人格ハ學術ノ進歩ニ由リテ向上シ學術ハ人格ノ向上ニ因リテ進歩ス 就中醫學醫術ニ於テ深遠ナル蘊奧ヲ究メ偉大ナル發明ヲ爲スハ唯才德兼具ノ人格者ニシテ始メテ能ス可ク到底人格具ハラサル薄志弱行者ノ企及フ所ニアラス 況ヤ曲學阿世ノ徒、破廉耻無節操ノ輩ニ於テオヤ 抑醫人ノ業タル人生壽夭ノ托スル所民命安危ノ繫カル所苟モ内ニ忠厚惻怛ノ誠ヲ存シ外ニ好生愛物ノ仁ヲ體スルニアラスンハ才智、人ヲ兼テ學識、群ヲ抜クト雖モ竟ニ濟生醫國ノ職責ヲ完スル能ハス 且病者ノ醫人ニ信賴スルヤ赤子ノ慈母ニ於ケルカ如ク殊ニ一般民衆間ニ於テハ醫人ノ一言一動直ニ病者ノ心理ニ影響シ感化ノ力、薰染ノ效、殆ト驚ク可キ者アリ 然ルニ斯學ノ研究全ク純理的ニシテ平素ノ觀察專ラ抽象的ナルヨリ動モスレハ高遠ナル理想ニ走り往往國體民俗ノ由來、綱常彝倫ノ根柢ヲ忽諸ニスルノ風アルヲ免レス 若シ此種ノ氣風ニシテ一般民衆ニ傳播スルカ如キアラハ流弊ノ及フ所洵ニ寒心ニ堪ヘス 應ニ知ルヘシ學術ノ習修ハ人格ノ修養ト相待チテ始メテ其功ヲ成シ人格ノ修養ハ國家思想ノ涵養ト並行フテ始メテ其効ヲ完フスルコトヲ

人格ノ修養ニ尤モ有効ナルハ良師ノ薰陶ト益友ノ切磋ト是ナリ 然レトモ薰陶切磋ヲシテ有效ナラシムルト否トハ乃チ各人ノ自覺ニ

在リ 學生諸子各々天職ノ重大ナルヲ自覺シテ品性ノ向上ニ奮興セハ教官ノ動靜、云爲見ル所トシテ薰陶ノ化ヲ及ボサ、ルハ莫ク朋友ノ談論、告戒聞ク所トシテ切磋ノ益ヲ加ヘサルハ莫カラシ 尙人格ノ修養品性ノ陶冶ニ資補ス可キ各種ノ機關ハ本學遂次創設若クハ推廣セントスルノ外又善ク此種ノ補助機關ヲ利用センコトヲ

實地ノ練習

實地ノ練習ハ醫育ノ最大要部ニシテ其深淺生熟ハ醫術優劣ノ由テ分ル、所ナリ 古語ニ三タヒ眩ヲ折リテ良醫ト爲ルト云ヘルハ此義ヲ言明シテ痛快ナリト謂フ可シ 故ニ苟モ醫育ノ目的トスル學校ニシテ醫院ヲ附設シ以テ實地ノ練習ニ資セサルハ莫ク即チ本學附屬病院ノ要旨モ亦斯ニ存ス 已ニ然ラハ院ト學トハ一ニシテ二ナラス院內ノ各部ハ學內教室ノ延長ニ過キス 凡ソ院ニ在リ事ニ從フノ諸子ハ宜シク教官ノ指導ニ從ヒ科學的ニ疾病ヲ鑑別シ豫後ヲ斷定シ治療處置ヲ行スルノ技能ヲ鍛鍊シ以テ他日醫人トシテ實際ニ臨ミ診按療護、萬ニ一失ナキヲ期スヘキコト固ヨリ多言ヲ要セス 唯茲ニ留意ス可キハ元來醫術行施ノ本旨ハ濟生保壽ノ實益ニ在リ抽象の理論ノ證明ニ在ラス 其實地練習ノ材料ハ有情ノ活人ニシテ動植若クハ非情ノ死物ナラサルヲ忘レサルコト是ナリ 故ニ練習ヲ行フニ當リテハ一面疾病ニ對シ冷靜ノ頭腦ヲ以テ精細ノ觀察ヲ遂ケ周到ノ計慮ヲ以テ最善ノ手段ヲ盡シ科學上最モ進歩セル事理ヲ實際ニ施シ病者ヲシテ文化ノ惠澤ニ浴セシムルト同時ニ一面病者ニ對シ忠厚惻怛ノ誠意ヲ以テ懇到深切ノ同情ヲ寄せ苟モ療護ノ進行ヲ害セサル事物ハ務メテ病者ノ願欲ニ任セテ其心胸ヲ安慰シ以テ精神的治方ヲ併施セサル可カラス 世上往往學校附屬醫院カ病者ヲ以テ學術ノ犧牲ト爲シ學生ノ草紙ト爲スヲ疑懼スル者アリ 顧フニ何レノ學校何レノ醫院ヲ問ハス苟モ疾病診療ノ事ニ從フ者孰カ最善ノ處置ヲ取リテ其回瘡ヲ力圖セサラン而モ疾病診療ノ事ニ從フ者孰レカ最善ノ處置ヲ取リテ其回瘡ヲ力圖セサラン 而モ乃チ斯クノ如キ疑懼ヲ招ク所以ハ職トシテ其誠意同情、未タ病者ニ貫徹セサル所アルニ由ラスンハアラス 殷鑒ハ遠カラス豈ニ深ク戒メサル可ケンヤ 要之學理ノ研究ハ至純ニシテ合理的ナル可ク實地ノ療護ハ至懇ニシテ同情的ナラサル可カラス 研究ハ天理ノ自然ニ則リ直情徑行ス可ク療護ハ人情ノ曲折ヲ察シテ寬裕仁慈ナラサル可カラス 練習及ヒ其指導ノ局ニ當ル者必ス混同シテ錯行スルコトナキヲ

要ス 論者或ハ本學諸員ノ附屬院務ニ執掌スルヲ見テ其教官ノ時間ヲ割奪シ研究ノ餘裕ヲ没却センコトヲ非議スル者アリ 熟ラ吾人ノ經驗ニ徴スルニ由來研究ノ冷熱ハ必シモ職務ノ繁簡餘裕ノ多少ト倒比セサルノミナラス實際職事繁劇ナル部門ニ却テ研究成績ノ觀ル可キ者多ク餘裕綽綽タル學科ノ研究室ニ滿室ノ塵埃ヲ見ルコト少カラス 顧フニ斯學ノ研究ハ病者其物ヲ資料トスル場合尤モ多キニ居ル此等ノ部門ニ於テ診療愈々繁劇ナレハ研究愈々精深ヲ加フルコト必然ノ歸結タラスンハアラス 復何ソ時間ノ割奪ヲ憂ヘン何ソ餘裕ノ没却ヲ恐レン 且世ニハ往々職務簡輕ナルカ爲メ自宅ニ診療所ヲ設ケテ研究ノ餘力ヲ斯ニ注ク者アリト聞ク 之ヲ本學ノ如ク各員全力ヲ學内ニ集メテ更ニ他事ヲ顧ミサルニ比スレハ其得失利弊果シテ何如ソヤ 要之研究ニ貴フ所ハ實績ニ在リ時間ニ在ラス實績ニ貴フ所ハ質ノ精粗ニ在リ量ノ多少ニ在ラス

本學ノ使命ト之ニ對スル吾人ノ覺悟ハ大略此クノ如シ 唯之ヲ遂行スル所以ノ機關設備ハ今日未タ吾人ノ理想ニ及ハサルコト遠シト雖モ若シ能ク推廣擴充進シテ退クコトナキニ於テハ早晚必ス完整ノ日アルヲ疑ハス 而モ是レ舉學同人ノ協贊ト大方ノ同情援助ヲ集ムルニアラスンハ大成スルヲ得サル所ナリ 吾人菲才ヲ以テ重責ヲ荷ヒ既往ヲ顧ミ將來ヲ思ヒ轉タ感慨ノ至ニ任ヘス敢テ嚮嚮ヲ敷キ各位ノ諒鑒ヲ祈ル

大正十二年四月十六日

京都府立醫科大學長 小川 瑳 五郎

此月、教授吉川順治、歐米各國に出張視察を命ぜられ、同年十月歸學した。去る二月より、視察のため歐米各國へ出張していた其の間に、醫專教授より大學教授に任ぜられた増田隆は、同年九月歸學した。

續いて、五月には、教授越智眞逸、歐米各國へ出張視察を命ぜられて出發、同年十二月歸學した。

同月、豫科教授兼醫專教授で附屬醫院の藥局長立人保太郎は、京都帝國大學醫學部の附屬醫院藥局長に轉任し、其

後任として藥學士森益藏が、十月、豫科教授兼醫專教授（化學）附屬醫院藥局長に任ぜられた。

陸格以來實施せられてきた京都府立醫科大學學則並に京都府立醫科大學豫科學則は、此年則ち大正十二年十月正式に認可せられた。京都府立醫科大學學則は總て六十條、章を分つ事十二章、總則以下、修業年限、學年學期及休業、學科及課程、入學在學休學及退學、學士試驗及稱號、授業料及實習料、服裝、懲戒及處分、研究科、選科生、外國人特別學生等を規定している。

豫科學則は、九章、三十四條より成り、總則以下、修業年限、學年學期及休業、學科及課程、入學在學休學及退學、試驗進級終了、授業料、服裝、懲戒及處分等を規定している。

是等の學則は、時勢の進退、社會情勢の變化等によつて、學年、學科課程、授業料等に關して一部改正が其後行われた。兩學則同時に行われた事もあり、單獨に行われた事もある。改正の内容については、詳細に叙べたいのであるが、紙數の制限もあり、終戦時の混雜に資料の紛失焼亡等の事あり、茲には細説をさけて、後日の考證の便を計り、一部改正の時日を擧げるに止める。

大正十三年十月一日 一部改正

大正十四年三月三十一日 一部改正

昭和二年一月廿九日 學專一四號 一部改正認可

昭和四年二月二十八日 學專五三號 一部改正認可

昭和五年一月十五日 京專一五八號 一部改正認可

昭和九年三月十五日 京專二一號 一部改正認可

昭和十三年三月十七日 京專四八號 一部改正認可

昭和十六年三月十九日 京專七號一部改正認可

昭和十六年以後も屢々一部改正を見たが、日支事變華やかなる頃迄の改正には發展の改正の色濃く、大東亞戰突人以後の改正には應急的措置の色彩濃厚で、此處にも國運の消長が反映している。

大正十二年十二月、東北帝國大學助教授後藤基幸、本學教授に任ぜられ醫化學を擔當する事になつた。

此年早く、醫學に關する原著、綜説、臨床瑣談或は討論を交換し、會員相互の智識を向上させる目的で、京都府立醫科大學學術集談會が、愈、組織せられ、八條よりなる會則を制定し、一月廿四日發會式を舉げた。會則によつて會長に推戴せられた小川本學學長の發會の辭は、本會の性質使命を叙べて餘蘊なしと思われるから要旨を述べる。

發會の辭

京都府立醫科大學學術集談會が成立して、本日茲に其の發會式を舉ぐることは、寔に欣幸に堪へない所であります。本會は既往成立すべくして成立を實現するに至らなかつたので、其の胚胎は業に已に學内に古から萌芽しておつたので唯時を得なかつたのでありますが、今や大學の基礎全く確立し學海に雄飛する第一年を迎ふるに當り、學内の氣分も亦自ら更新せられなければならなかつたのであります。否軒昂たるものがあるのである。吾々は此機運に會し潑瀾たる意氣と洋洋たる希望を抱いて、本會の成立を茲に催迎したのであります。固より本會の理想抱負は遠大にして其の前途も亦遼遠たるものでなければならぬが、歩一步、之に對して實現の歩を進めなければならぬ。

現下、學界には其業績の發表に各分科學會、或は専門雜誌がありまして、各自の業績は是等の機關に於て夫々發表せらるべきであります。本會に於ては、先づ最初其の第一歩として、吾々が日常實地に於て、或は研究の傍ら得たる興味ある新知見、經驗、或は新現象等を吐露して、互に意見を交換し之によつて更に第二の研究方針を樹立する等、少くとも他山の石たらしめたいのでありま

す。之等の事項は、素より既成論文として發表するには至らないのでありますし、又、徒らに隆底に深く藏することの甚だ愛惜に堪えないところのものであるからであります。由來、凡ての大發見は一寸した自然現象に其の暗示を得て來る場合が頗る多いのである。吾々は斯る意味に於ても、本會が毎月例會を開き、而かも強制的に各教室輪番で其の責めに任ずることを決定したのも、強ち故なきにあらざらと思ふ。加之本會を一面には學會演説の豫習練習に應用し、或は演説法の研究、且つ演説を聴取し其の要旨を理解することの練習にも利用するならば、吾々の一修養として、實際上、必要な事であらねばならないのである。本會は、勿論、其の他、綜説なり原著なりを發表すべく、又、逐次其の多きを期待するのみならず、哈度、將來は、本大學に於ける纏つた業績を發表して講師たるの抱負を述ぶる事、斯の獨逸の *Habitationsrede* の如きものとす機會に利用するには、最も好都合と信じて居ります。更に進んで本學の研究の一新學風を樹立して、斯界に不羈獨立の新生面を拓き、以て斯界に貢獻するところあらしめば、之、望外の幸と謂はねばならない。

發會式當日は、式後、赤座、常岡兩教授の特別講演あり。教授以下學生に至る迄會する者無慮五百、市内在住の校友も多數參會し、頗る盛況の裡に多幸なる首途に上つた。會規により第一回の集談會は、豫定の二月十四日は伏見元帥宮殿下の國葬とかち合つたので繰下げて、二月十六日、外科第二部・小兒科・耳鼻咽喉科の三教室當番で、角田教授座長として司會の下に開會、折柄、朝來の風雨で學外の聽講者は比較的少かつたが參會者約百名に及んだ。爾來此集談會は連綿として打ち續き今日に及んで、多大なる成果を舉げて所期の目的を果しつつある。

發會式當日の特別講演並に第一回集談會の發表の題目を舉げて當時を偲ぶ事にする。

學術集談會發會式（大正十二年一月二十四日）

特別講演

醫科大學時代

一、「ミクロトーム」の供覧

一、微生物學界に於ける晩近の進況

赤座教授
常岡教授

第一回學術集談會（大正十二年二月十六日金曜日）

一、糞石に因する腸壁穿孔の一例

外科教室（主任鈴木教授）原 唯一

二、哺乳兒に於ける顎下淋巴腺膿瘍に由る喉頭狹窄の一例

小兒科教室（主任三浦教授）山本 卓

三、惡性腫瘍の異種動物移植試驗（第一報告）

病理教室（主任角田教授）木村嘉一

四、人尿の一反應並に該反應成立の機轉に就て

胃腸科教室
宮崎正一

五、黃疸に因する雌性生殖器變化に關する實驗的研究

病理學教室（主任角田教授）中本完二

六、ヘモクラジッセクリーゼニ就テ

内科學教室（主任小川教授）田桑眞男

七、溫熱性眼球震盪症の實驗的研究

景山米治郎

八、脾臓の一汎性癌轉移に就いて

醫學士 本田郁也

大正十二年四月、豫科からの進學生と醫專卒業生とから成る本科第一學年が出来て大學の實體が具わると、早々起つて而も容易に解決せず、遂に年を閲みして翌十三年に入つて漸く落着いた事件がある。それは校章——學章の件である。つまり本學の校章制定の問題である。豫科の校章制定に就いては既に述べた。茲に本學本科の校章の生れ出づる惱みの経緯について述べる事にする。是には、當時の學生たりし白井正一の、此問題に關する學生側の委しい消息を述べた手記や、同じく中野武の當時の學生生活の追憶の手記あり。又昭和廿八年三月十九日の回顧座談會の席で述べられた川西武夫の談話など、彼は參考し、記者の見聞などをも加えて、今日の我大學の校章の制定されるに至つた

經緯を辿つて見た。

本科に初めて新入學生を迎えるに當り、大學に於ては、本科の校章に關し、教授會に於ていろ／＼の案をあげて審議していた。結局、審議の主流は、本學は單科の醫科大學であるから「醫大」の文字を圖案化する案と、將來、京都府立の總合大學設置の豫想の下に「大學」の文字を採るべしとなす二つの案に歸着した。そして二者擇一の最終決定は、遂に後者の占めるところとなつた。然し、此の決定された「大學」の圖案を見た學生は満足しなかつた。此の圖案の原型は、明治大學の校章をつくりのもので、唯、中央の「大學」の文字を下部で左右に抱き合せている「明治」の二字を省いたものに過ぎず、且、殘された「大學」の文字も細長く不格好で、其字劃も當時の帝大のそれとは全く違つていた。そこで、此圖案に失望した學生は、左右對稱もよいから、もう少し格好がよくなる様に幅をつけて貰いたいと、教務課を經由して教授會に歎願書を提出し、同時に學生はそれ／＼手分けして各教授を個別に訪ねて歎願し廻つた。學生代表が小川學長を學長室に訪ねて歎願したところ、「俺の眼の黒い間は、帝大の徽章と紛らわしい様な徽章は絶対に許さない」と一喝されて引下つた場面もあつた。かくて茲に學生達のレジスタンスが始つた。それは暗々裡に行われた大學規定の校章の忌避運動である。學生達は登校時にも制帽を冠つて來ない。新入學年の學生が一人も制帽を冠つて來ない。制服に無帽とあつては目立たぬ筈はない。醫專出身學生中には、背廣姿で登校するものもあるという有様。これに對し、大學當局からは「學則に基き學生は登校に際して制服制帽を着用すべし」との嚴重な揭示が出たが、學生のレジスタンスは依然頑強に續いて行く間に夏季に入つた。當時、夏季に麥稈帽が略帽として許可になつて居たので、是幸いとばかり、學生一同は之を用いて夏季を凌いだ。斯くて夏期休業も終り、九月には第二學期も早々にすぎ、十月に入つて麥稈帽も時季外れの候になつても、制帽を冠ろうとするものがない。學生のこうした態度に大學當局側も益々強硬になり、「制帽を着用せぬ者は嚴重に處分する」と警告した。茲に面白い現象が表われた。秋深く時には霜置く冷い朝に、依然、麥稈帽を被つて來る強硬組、校門から教務課（當時は今の本館階下南側）の前を通つて教室に入る迄制帽を冠る要領組、依然として無帽主義に倣する中間組、大體以上の三様の學生登校姿が見られた。此の光景を大學

當局が默過する筈がない。果然、違反者數名が當時の學生監角田教授に呼びつけられて無期停學を申渡された。事態が此處迄來ると、當初、目的貫徹まで頑張るとレジスタンスをやつて來た學生側も、何とか打開策を講じなければならなくなり、要領よく處分を免れた者も、方法こそは違つてるとは云え、校章忌避の精神には變りがないのであるから、是は一同の連帶責任である、「一同登校を遠慮すべし」との強硬説も出たが、結局自重論が勝つて一應大學に詫び、學則を守る事を誓つて此のレジスタンスも表面的にはケリがつき、被處分者の停學もとけ、心ならずも問題の校章をつけた制帽を冠つた時が暫く續いた。此問題は、遂に年を越して大正十三年に入り、小川學長が歐米視察を命ぜられ外遊し、其不在中小兒科學の三浦操一郎教授が學長代理を務めた間に、學生等は好機到來と許りに再び教授會に歎願書を提出し、一方、一同手分けして各教授を個別訪問して、學生の意向を開陳して大いに努力した結果、漸く教授會の容認を得る事が出來、遂に今日吾々が日常親しんでいる校章が公認せられたのである。同時に豫ねて學生間の話題となつていた襟章の件も、校章の公認と共に具體化し、「醫」の字を圖案化したるものを制服の左襟に附する事になり、是亦、教授會の公認により、學則に規定せられて今日に到つた。之により學生の專攻する學科も明らかになり、紛らわしい帝大の校章との判別も容易になつた。事毎に官學に附隨し、「校章迄も模倣して」の世評がなくなかつたが、此の「醫」の襟章は、効果の點は兎も角、ささやか乍ら此世評に應えたものと言えよう。

之について、學生の氣宇の小、事大主義、奴隸根性の表現と學生のみを責むる事勿れ。世は舉げて官學萬能時代、所謂外様教授の足は兎角其の出身校に向ひ勝ちの時代、多數の教官が新設の官學京大に馳り去つた時、敢然として孤壘を守り通し、今日の我學園の繁榮の基礎を築いた故島村校長の偉業を今更乍ら賛えざるを得ない。小川學長が、最初此校章に強く反對された眞意も、島村校長の精神と一脈通ずるものがあつたのだと思う。今日の世相より、學生の意氣を唯單に「稚氣」と笑ふこと勿れ。是も當時の時代思潮、社會世相の反映に過ぎないのである。茲に少なからぬ

紙面を費して此校章問題を扱つたのは、此三十年間に於ける我國の時代精神、社會世相の變遷をば、終戦後の學生生活、學生運動と對照して回顧したかつたからに外ならない。

大正十二年五月、本學學位規定が文部省京專第三四號にて認可せられた。此學位規定は「本大學ニ於テ授與スル學位ハ醫學博士トス」の第一條以下十條より成り、其後一部改正が、昭和四年十二月文部省京專一五四號にて認可せられて今日に至つてゐる。改正の點は第八條の學位記の様式で、改正以前は學長名にて授與せられていたのが、以後大學名にて授與せられる事に改正された。此認可により、愈々本學も學位を授與する事が出来る様になり、大正十四年四月十一日、宇野鬼一郎、古玉太郎の兩名が榮ある其の第一回の受領者となつた。主論文は夫々「外科的疾患並其手術後ニ於ケル「アチドージス」ニ就テ」、及び「變性凝集反應（あぐるちのいどふゑのーめん）ニ關スル研究補遺」であつた。爾來、連年幾多の優秀なる研究の成果續出し、創立第八十周年の昭和廿七年十月二十三日迄に學位を授與せられた者、實に六五二名に達した。當初百圓の審査料は、終戦後の通貨大膨脹により、千圓と五千圓と、二回に改正された。

九月一日の關東大震災には、本學の使命に則り、物質的の方面に於ても救護作業に於ても多大の寄與をした。鈴木教授は三日にはいち早く東上し、五日には木村助教授出發、松永助教授は京都市救護班班長として七日出發、九日には内、外科より數名の醫員が府・市の救護班に加わりて出發、それ／＼現地にて救護作業に活躍した。廿四日には淺山教授も上京して震災の跡を視察、赤十字救護所・帝大醫學部・各醫專校を親しく訪問、本學を代表して震災の慰問の辭を述べた。十月に入つてから、横濱市元第二衛生試驗所跡に設けられた關西二府聯合大假病院に、醫員三名及看

護婦十五名が派遣せられて救護作業に活躍した。物質的方面に於ては、震災の報到るや、病院では夜を日について糊帶（五百反）の作製、校院内職員、入院患者中よりの慰問袋（六百個）、義捐金（二百圓餘）等を得て、糊帶は自動車三臺に満載して發送し、慰問袋、義捐金等は京都府に委託した。本學學生・豫科生徒の義捐金約三百餘圓も京都府に委託した。八日には文部省よりの希望により、綿花約五十貫、糊帶五百匹、ガーゼ百反、藥品類をも發送した。

震災救護作業は、獨り今回に限らず、其後昭和時代に入りて起りたる北丹但馬の震災、鳥取の震災、戰時中二回に亘れる大阪大空襲の罹災等にも、時を移さず、敏捷に救護班を編成派遣して活躍した。

大正十三年一月、學長兼教授小川堯五郎、歐米各國へ出張視察を命ぜられたるに付、教授三浦操一郎、小川學長出張不在中學長代理を命ぜられた。

同月、教授本永七三郎、亦、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、同年十二月歸朝した。三月に入り、豫科教授野村梅吉、福岡高等學校に轉任のため退職。助教授藤井猪十郎、大學教授に任ぜられ藥物學を擔當する事となつた。又、豫科講師高坂正顯は豫科教授に任ぜられた。五月、豫科教授永井種次郎、大阪高等學校に轉任のため退職、其の後任として理學士東儀正及び理學士北村春吉、豫科講師として來任、共に數學を擔當する事になつた。

第一學期も終りに近い六月下旬に、豫科に於て試験の受験規則の改正があり、七月上旬に施行される第一學期試験より實施の旨が突如發表されて生徒一同に衝動を與えた。特に第三年生には、此改正規則の實施により受験不能者が少からず出る事になるので、改正規則其物は、學年間を通じて見れば必ずしも苛刻なものではなかつたにも拘らず、廣木豫科主任事の説明に満足せず、當面の支障にいきり立つた三年生は、心の駒の奔るに委せて、反逆の先輩足利尊氏

の木像の蟠居する等持院に立て籠り、抗議の的も何時しか廣木教授の豫科主事退任の要求へと移行して終つて、連日、約一週間に及んだ。行動の形態も、從來の學校騒動のそれとは違い、主動者の見えぬ全員連帶性を帯びていて、前年の關東大震災以來、財界の變動により頻發せる勞働爭議とよく似ていた。こゝにも世相の反映が表われていると言えよう。此間三年生の父兄の有志の調停や、學長代理三浦教授の盡力も頼には進捗しなかつたが、遂に學長代理の「自分に一任しなければ、當局にも決心がある」の一言に、穩和的意見が有力になつて、當局を信賴して一任しようと言ふ事になつて籠城を解いた。七月上旬行ふ第一學期試験は九月早々施行と言ふ事になつた。豫科教授會側に於ても、此度の改正規則の實施を前提としての發表は、確に唐突の嫌あり、且、發表を急ぐの餘り、學長代理の決濟を待たずして發表した事は、説明の不徹底と共に充分自己批判に値する事であつた。然し此爭議には、抗議の的が何時しか主事退任要求に移動し、其要求も、教授としての廣木教授の排斥ではなくて、唯豫科主事としての廣木教授の退任を要求している點など、唯單に一圖なる青年の客氣の奔流とのみ考えられない點があつて、奧齒に物の挾つた感があつた。事件落着後、三浦學長代理の豫科教授會に臨んでの諭示の際にも、「小生の苦衷を察して……」の言葉があつて、豫科教授側に割り切れぬ後味を残した。此爭議に始めより堂々反對演説をして、遂に加わらずに押し通した生徒が一人いた事を附記して擱く。

七月に入り、小川學長歸朝に付き三浦教授の學長代理を免ぜられた。

此月五日から十日迄、豫科二年級の生物學實習の一部として、三重縣鳥羽で臨海演習を行つた。此臨海演習は、昨十二年夏の同じ頃、兵庫縣淡路島の志筑で第一回を實施したのであるが、其時は豫科二年、三年の有志を募つて行つ

た。今年からは二年級の生物學實習の一部として實施する事にきまり、場所も交通の便利な、實習材料の豊富な鳥羽に行く事になったのである。

箕浦教授以下職員生徒併せて三十名、小學校の一室を借りて假設實習場を設け、六日より九日に亘り、連日ブランクトン採集を始め、岩礁地、砂泥地採集、深水性動物採集に到る迄、島々を縦横に馳驅して活躍しては顯微鏡實習に勵んだ。好天氣に恵まれ所期の成果を得たが、此意義ある臨海實習は、其後昭和に入つてからも數年續いて、同地に於て毎夏實施せられた。

八月に入り、豫科教授宮田一、公立大學學生監兼任を命ぜられ、主として豫科生徒の輔導に當る事になった。

九月、豫科主任廣木教授は依願主事を免ぜられた。最後の醫專學生五名の卒業試験も此月廿五日終了卒業し、京都府立醫學專門學校は九月三十日限り殘務終了し、廢校となつた。

十月一日より醫學專門學校附屬病院は京都府立醫科大學附屬醫院、醫專附屬產婆看護婦教習所は醫大附屬產婆看護婦教習所と改稱する事になった。

此月、講師久保昱二郎（神經精神科學）、同高橋義行（微生物學）、何れも大學助教授に任ぜられた。

昨大正十二年六月に起工し、銳意工事中の附屬醫院の炊事場及び大食堂建築工事は此年九月に竣工し、鐵筋コンクリート近代復興式陸屋根造り三階建（地階共四層）の清楚なる姿を河原町通りに現わした。建坪一三二坪、延坪五六・五坪、地盤よりパラベツト上端迄の高さ四十五尺三寸に及ぶ。内部の設備も最新式に最善を期し、眞に病院の炊事場に恥じざる設備をしたもの。總計費は凡ての附帶工事を含めて拾壹萬八千圓餘を要した。

此年十月十六日より十八日に亘り、愛知醫大豫科の教授以下生徒全員を我校庭に迎えて、兩大學豫科の交歡對抗競

技大會を行う。

此對抗競技大會は、前年即ち大正十二年の秋第一回が開催せられ、其時は吾々が名古屋に全校舉げて遠征したので、今回は第二回に當るが、我校庭に迎えたのはこれが初めてである。爾後、昭和六年に愛知醫大が名古屋帝大醫學部へと移管せられるため、同大學の豫科が廢止される迄——昭和五年の秋迄、隔年毎に或は遠征し、或は迎えて交歓した。競技は學友會の各部——獨り運動部のみに限らず、文化部も——に亘つて行われ、勝利の女神は必ずしも常に我が側に味方したわけではなかつたが、一同勝敗を度外視して健闘し、教授團もラケットをコートに揮うなど、秋空に兩校の若人の意氣高く揚り、十二分に交歓の實を擧げた。

同じく十月、去る三月豫科教授野村梅吉退職後、其後任として來任したる豫科講師文學士宇野喜代之介、豫科教授（獨語）に任ぜられた。

此年十一月、教授中川清、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、翌十四年十月歸朝した。

大正十四年三月末には、去る大正十一年九月廿四日焼失せる本館の新築落成した。焼失せる舊本館は木造二階建てであつたが、新館は鐵筋コンクリート造で、外部は人造石洗出仕上、腰廻りは本磨花崗岩造りで舊館の跡に立つ、建坪七十七坪九合、延二百二十六坪餘、地上よりパラベット上端迄の高さ三十五尺五寸の三階建、これに要した費用は九萬八千圓に上つた。其の三階の百二十帖敷の廣間は、其後水く式典其の他の行事、會議等に使はれて、吾々の慕しい追憶のホールとなつてゐる。一階二階の諸室は教務課と、中央圖書館の新築を見る迄、圖書館の書庫及閱覽室等に充當せられた。

四月、教授鈴木正次、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、同年十月歸朝した。同月、神戸高等工業學校教授文學士佐

佐木宗要、本學豫科教授に任ぜられ、修身、英語を擔當し、同時に豫科主事に補せられた。又數學擔當の豫科講師東

儀正は豫科教授に任ぜられ、豫科教授兼大學附屬醫院藥局長森益藏は大學附屬醫院藥局長兼豫科教授に補せられた。又、後藤五郎、新に大學助教授に任ぜられた。

木 宗 要



世界の恒久平和を期して吹奏せられた一九一八年十一月十一日の第一次世界大戰の休戦ラッパの音も空しく、恒久平和の理想實現の實行機關として米國大統領ウッドロー・ウイルソンの提唱によつて成立した國際聯盟も、成立の當初、提唱者ウイルソン大統領が代表する北米合衆國民の否認に會つてウイルソンは浮き上り、且、國際聯盟の機構其物にも、強力なる制裁手段の缺如始め、大國には有利に小國には不利なる幾多の缺陷を藏し居たる事とて、各國は聯盟に加わり乍らそれ／＼自國の利益の保護増進、國力の強化に専念し、人類のための永遠の平和を期する聯盟精神は單にお題目化するに到つた。世界に國を建て聯盟の一員、而も五大國、後には三大國の一員たりし吾國も、此の聯盟成立後僅か數年にして、世界に瀰漫せる理想と現實の背馳の裡に孤立する事が出來ないで、次第に聯盟精神から遠ざかつて行つた。國力の強化の旗幟の下に一路邁進し、其の一端として、學校教練の強化が叫ばれ出した。中等學校以上大學に到る迄、學生生徒に軍事教練を施そうと云うのである。是に於て、世論沸騰、賛否の論喧騒を極めたが、遂に世界の大勢の渦を脱する事能わず、軍事教練を實施する事になつて、後年の日本の悲劇の第一歩を踏み出す事になつた。時に大正十四年四月。第一回配屬將校として、歩兵第

二十聯隊附歩兵少佐石井親俊、本學服務を命ぜられ、豫科の軍事教官として着任した。

大正十四年四月十九日、丁度此日は日曜日であつた。本學陸格に當つて偉大なる貢獻をした本學陸格期成同盟會は、其の解散式に兼ねて陸格記念碑除幕式を豫科校庭に於て舉行した。春日麗明、時と天候とに恵まれて、荒木京大總長始め、府・市學事及衛生當局者、府・市會議員、各學校長等の來賓、在京及び地方の卒業生諸君の多數の來會あり、午前十時半、梅原理事の開會の辭に始まり、同氏令嬢の手によりて意義深き記念碑芽出度除幕せられた。次いで角田理事立つて別項の如き式辭を朗讀、續いて小川學長の祝辭、荒木京大總長、安田京都市長等の祝辭を始め、井尻船井郡同窓會代表・小笠原京都市・山本滋賀縣・三浦兵庫縣・阪井和歌山縣・松下三重縣・田村廣島縣・佐藤天田郡各同窓會代表、駒井學生總代等の祝辭、及び各所より寄せられたる祝電の披露あり。最後に常岡理事、同會役員を代表して一場の挨拶ありて式を閉じた。引き續き道場に設けられた宴席にて立食の饗應あり、宴酣なる時荒木京大總長の發聲にて、本學及期成同盟會の萬歳を三唱して解散した。

記念碑は、方五尺、高さ一丈四尺（別に基礎三尺五寸）で、頂上に獅子獸王が巨口を開いて寶玉を抱いている銅像を安置している。獅子の像は熱烈なる愛校の至誠を以て天下に獅子吼せる期成同盟會の主體を象徵し、抱いている寶玉は不朽の歴史と重大なる使命を有する母校を表現している。碑銘は本學出身の先輩木村得善の筆になるもの、碑文は京都市の書家川島睦山の筆、獅子の鑄造は京都市知名の塑像家大西三四郎及び高橋才治郎の作、又、石部工事は石工内田龜次郎の手に成るものと云う。

角田理事が當日朗讀したる式辭は、期成同盟會の成立並に其の事業經過を綜括して述べ餘蘊なきを以て、茲に、小

川學長の祝辭と共に全文を供覽する事とする。

角田理事 式 辭

奉天則麗トシテ洛陽ノ四圍櫻花ヲ以テ飾ルノ本日ヲトシ貴賓貴紳ノ臨場ヲ辱クシ茲ニ盛大ナル陸格記念碑除幕式並ニ本會ノ解散式ヲ舉行スルハ誠ニ光榮トスル所ナリ 回顧スレバ大正九年四月本會ガ母校陸格運動ニ就テ宣言ヲ發表シテ以來已ニ五星霜ヲ閱シ此間愛校ノ至誠ヲ以テ一意此事業ノ貫徹ニ盡瘁シ幸ニ所期ノ目的ヲ達成シ得タルハ是全ク府民諸彦ノ同情アル協賛ト當局並ニ關係諸賢ノ熱心ナル盡瘁努力ニ係ル賜タルコト勿論ナリト雖モ亦本會ノ此間ニ致セシ功績敢テ尠ナラズト信ズルモノナリ 依テ此事歷ヲ石ニ刻シ永ク後昆ニ傳ヘント欲シ陸格記念碑ヲ建設ス 其碑文タルヤ本日茲ニ言ハント欲スル所ノ全貌ヲ盡シタレバ一讀シテ式辭ニ換フ

醫育統一論懸案經久荏苒不決已到達其實行期先是校友顧時勢推

移翹望母校陸格有年矣大正八年十月原內閣鑒於歐洲大戰後世界

趨勢指示其政綱擴張高等教育以 勅令變更大學令開單科大學設

立之途校友以謂此機不可逸飛檄全校友大正九年四月二日開校友

大會於三條青年會館來會者數百名各披摺赤誠討議必須案件確定

陸格期成同盟會組織發表宣言書送達之四方喚起輿論以期積年宿

望必成其要曰

獎勵醫學啓發後進關國家興隆之機運至大也圖醫育統一則天下

之公論時勢之要求也頃日政府發布新大學令認容單科大學設立 (南)

是醫育統一之前提吾人蹶起鷄聲矣我校興廢係此時機豈可不警醒哉顧念從來有光輝我校歷史與有偉績我校實況令我校陸格醫科大學吾人當務之途而亦是所以益國家利社會也

於茲樹立陸格運動大施揚喊聲應四方內外翕然應之如火之燎于原其勢熾烈對文部省及本府屢得其了解猶歷訪府會議員覓其協贊同年十二月府會以其決議提出本校陸格建議書而企畫始完了於是社會輿論漸識認本校陸格不可附等閑其後經幾多迂餘曲折大正十年十月十九日得本校陸格認可遂達成其目的依基當初大會決議欲募校友釀金補充擴築費發表其趣旨全校友以愛校之至情爭先應募至其金額拾參萬六千八百圓餘則購入豫科校舍並附屬花園分院建設敷地六千八百九十六坪餘寄與之大學又別提供金貳萬圓補助本學本館建築費猶有剩餘金若干圓寄附是本學獎學會爲獎學基金本會際於母校興廢危機愛校之至念凝爲一團東奔西走百方苦心終能貫徹其初志本會盡瘁母校陸格可謂勉也因永爲記念建此碑記其顛末云爾

大正十四年四月

京都府立醫科大學期成同盟會建之（北）

（記者註） 碑文は碑の南面より始まり、東、北の三面に亘つて刻してあるので、碑文中各面の終に「南」「東」「北」等の表示をして措く。目障りな點幾重にも御容赦を乞次第であるが、是にて、碑文の「在り方」を彷彿して載けると思う。

小川學長 祝 辭

本日茲ニ陞格記念碑除幕式並ニ陞格期成同盟會解散式ヲ舉行セラル、ニ當リ一言祝辭ヲ陳ベテ感謝ノ意ヲ表スルハ不肖ノ光榮トスル所ナリ 曩ニ原内閣ノ大學令改正ヲ機トシテ本學陞格ノ企圖セラル、ヤ愛校ノ至誠ニ燃ユル校友諸君ハ激ヲ全國ニ飛バシ同志ヲ糾合シテ陞格期成同盟會ヲ組織シ一致團結以テ輿論ヲ喚起シ釀金ヲ募集シ熱心奔走幾多ノ難關ヲ經テ遂ニ大正十年十月本學ノ陞格認可セラレ其釀金ハ豫科並ニ花園分院ノ敷地購入及講堂改築費等ノ各經費ニ充當シ以テ今日ノ整備ヲ見ルニ至レリ 是レ洵ニ同會ガ熱誠盡力ノ賜ニシテ不肖ノ感謝措ク能ハザル所ナリ

輓近世道漸ク堯季人心浮華ニ流ル、ノ時ニ際シ同會ガ本學ノ爲メニ傾注セラレタル報本ノ至誠ハ社會ノ以テ範トスベキ所ニシテ而シテ本學ノ史上ニ光彩ヲ加フルモノト云フベシ 今ヤ同會ハ全ク所期ノ目的ヲ達成シ茲ニ記念碑竣工除幕式ヲ舉グルト同時ニ其解散ノ式ヲ行ハル 思フニ巍然タル豐碑ハ永ヘニ陞格ヲ記念スルト共ニ同會ノ功績ハ應ニ不朽ニ傳フベキナリ 豈慶賀セザルベケンヤ 式ニ臨ミ聊カ所感ヲ陳ベ以テ祝辭トナス

大正十四年五月、豫科教授廣木多三、願に依り退職し、改めて豫科講師となり、從前の如く獨乙語を擔任。同月、講師宇野鬼一郎、大學助教授（外科學）に任ぜられた。

同じく九月、大學助教授齋藤二郎、歐米各國へ出張視察を命ぜられた。同氏は翌十五年六月歸朝したが、昨大正十三年十月一日、京都府訓令第三〇五號を以て發程せられた京都府立醫科大學職員留學規程が出来て以來、教授以外の職員の海外出張は同氏を以て嚆矢とする。因に同規程は、昭和二年一月訓第八號を以て一部改正があつたが、總計十二條よりなり、職員の外國又は内地留學に關し、其の期間、費用、留學者の留學中及び歸學後の義務等、私費留學をも含めて一切を規定したもの。此規程の制定と共に、大正十年七月京都府訓令第一六號京都府立醫學專門學校職員留學規程は廢止せられた。

豫科教授吉峰時之輔（化學）はかねて病氣中の處、九月休職となり、引き続き靜養に努めたが、十月、遂に死去した。後任には、藥學士森島三郎、豫科教授に任命された。

此年十一月、産科婦人科學擔當の教授加治安信、願に依り本職を免ぜられ、京都帝國大學醫學部助教授山田一夫、後任として本學教授に任ぜられ、産科婦人科學擔當、附屬醫院の同科部長を命ぜられた。

大正十四年も押し詰つた十二月、眼科學擔當教授増田隆病死した。

大正十五年三月、助手中尾幸夫、助教授（醫化學）に任ぜられ、四月、教授藤井猪十郎、歐米各國へ二カ年間に出張視察を命ぜられ昭和三年五月歸朝した。同月、藤原謙造、本學講師を囑託せられ眼科部長を命ぜられた。五月には、助教授中尾幸夫依願退職、助手本田郁也、助教授（病理學）に任ぜられた。六月に入り、助教授宇野鬼一郎、依願退職した。

豫て再築なれる本館二階に開設準備中の本學中央圖書館は、梅原教授監督の下に下河邊光行及び新任圖書館員赤星

軍次郎（元京都帝大圖書館書記）等の努力により整備を了し、中央圖書館の機構茲に完成、去る四月上旬より開館の運びに至つた。本學圖書は、從來、各教室の保管に委せられて居たが、これにより凡ての圖書は、購入・保管・整理等一切、秩序ある中央圖書館の機構の中に置かれる事になつた。同時に中央圖書館規則及び同規則執行手續規程も制定され、教授梅原信正は、六月、正式に中央圖書館主任を囑託された。此時、中央圖書館に各教室より集積せられたる單行本のみで四、九三冊を數え、其他雜誌類（主として外國雜誌）略單行本と同數あり、概算約一萬冊に上る。それが昭和廿七年第八十周年には、七一、一一八冊を數うるに到つた。其の間、圖書館主任も、梅原教授以後、赤野、藤井、吉村の諸教授相次いで八十周年に及ぶ。

此年七月、講師眼科部長藤原謙造、教授に任せられ眼科學を擔當、教授野田浦弼、依願退職し、助教授久保昱二郎、其後任として教授に任せられ、神經病學・精神病學を擔當し神經精神科部長を命ぜられ、花園分院長となつた。前年來、公命により東京帝國大學醫學部に出張、同學物療科教室にて研究中の助教授後藤五郎は、研究を了え歸學、レントゲン科部長を命ぜられた。講師川井銀之助、助教授に任せられ胃腸科副部長を命ぜられた。

八月に入り、學長兼教授、附屬醫院長、内科第一部長小川瑤五郎は願に依り本職並に兼職を免ぜられた。小川學長は大正三年京都府立醫學專門學校教諭として本學園に赴任以來茲に十有二年、其間、大正六年七月には校長となり、十年十月には大學長となり教授を兼ね、大正六年以來附屬療病院長及び附屬醫院長を兼ねた。其の在職中、府立病院の聲價を高め陞格の實現を見た事は、小川學長一人のみに由るのではない事は勿論乍ら、陞格後第一回の大學卒業生を世に送る日を明年に扣えながら、何の未練もなく、創業の仕事を了して後の整備の基礎を築いて、後事を他に

托して去る、其の進退は確に異色あるを失わない。

第二期 整備時代

吾學國の歴史は、茲に、第二期整備時代に入る。



愛 山 忠 淺

大正十五年八月、小川前學長の後を受けて教授淺山忠愛、學長兼教授に任ぜられ、附屬醫院長を兼任、同醫院の内科第一部長を命ぜられた。同月、豫科講師勝義孝、助教授（解剖學）に任ぜられた。

九月、京都帝國大學助教授飯塚直彦、本學教授に任ぜられ内科學擔當、附屬醫院の第二内科部長を命ぜられた。十二月には教授島田吉三郎、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、翌昭和二年六月歸朝した。

此月廿五日、大正天皇崩御、昭和と改元せられた。昭和二年二月、學生監宮田一、學生總代二名と共に、宮城二重橋廣場前にて大正天皇の御大葬を奉送した。當夜、本學に於ては講堂にて、學長諸教授以下學生生徒職員一同御大葬遙拜式を舉行した。

三月七日の北丹大震災に際して本學より救護班を派遣したる事、大正十二年の關東大震災の記事の後に一言した如く、其の救護作業の活躍には目覺しいものがあつた。

此月、本學第一回の卒業式が舉行せられた。當日芽出度學士試験合格證書を授與せられた者二十七名（但し不定期

卒業生は算入せられていない。以下之に準ず。

五月、教授角田隆、歐米各國及支那へ出張視察を命ぜられ、同年十二月歸朝した。同じ五月、豫科教授宮田一、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、昭和四年一月歸朝した。同時に、教授角田隆、豫科教授宮田一、順に依り學生監の兼職を免ぜられ、教授常岡良三、豫科教授榎本安三郎、學生監兼任を命ぜられた。

本學も、第二代學長淺山忠愛の就任と共に整備の時代に入つた。其の最初の表現は、京都府立醫科大學學術研究會の誕生である。學内教職員及び卒業生を主として組織せられ、會則（總計十七條）を制定し會員を募集して、其發會式を六月十二日本學講堂に於て舉行した。學術研究會の誕生により、從來の學術集談會は本會の事業となり、京都府立醫科大學雜誌は、昭和二年五月發行（通卷第一〇四號）から純然たる學術雜誌となつて、京都府立醫科大學雜誌第壹卷第壹號と衣更えして、後、學術研究會の事業となり、本學研究業績の發表機關として活躍して居る（雜誌發行に關する規定は別に十六條制定された）。會則により會長には淺山學長、理事長には梅原教授が就任した。

學術研究會創立委員が京都府立醫科大學雜誌第壹卷第壹號の卷頭に掲げた發刊の辭は、本會成立の經緯、本會の使命、抱負等を叙べて餘すところがない。仍て後學の爲其の全文を供覽する。六月十二日發會式當日の淺山會長の式辭は、此發刊の辭其の儘に、前後數行の加筆と、中に一、二行の轉移、加除があるのみに過ぎないから、割愛することとする。

本誌發刊ノ辭

本學ノ前身京都醫學校ノ開設セラレタルハ、明治維新ノ變頭ニ屬シ其ノ濫觴ヤ甚ダ遠ク、既ニ星霜ヲ閱スルコト六十餘年、此間幾

多ノ變遷改革ヲ經タリト雖、其趣旨ハ一貫シテ西洋醫學ノ普及啓發ニ力メ、本邦醫學ノ獨立ニ盡瘁シ、其貢獻シタル所偉大ナルヲ信ズ。今ヤ世界大戰ノ勃發以來歲ヲ閱スルコト正二十有三、此間我國ニ於ケル醫學ノ進運ハ實ニ驚異ニ値ス可ク、變々乎トシテ其窮極スル所ヲ知ラズ、其業績ノ較著ナルコト、復タ彼所謂泰西先進ノ諸國ニ比シ、敢テ軒輊アルヲ認メズ、唯憾ラクハ之ヲ發表スルニ當リ、此ガ機關ノ整備ニ於テ、我ハ彼等ニ一籌ヲ輸セザルヲ得ズ、嗟吁是洵ニ本邦醫學ノ一大恨事ナリ。

凡ソ學術ハ其研究旺ナルモ、其發表機關ニシテ備ラザレバ、又健全ナル發達ハ得テ之ヲ望ムベカラズ、而シテ研鑽彌々精ニ、其檢討彌々密ナルニ至レバ、此ガ發表機關モ益々純學術的トナルヲ要スベシ。本學ガ附格以來銳意諸般ノ施設改善ト内容充實トニ腐心シ、瞬時モ時勢ノ進運ニ後レザランコトヲ之レ力メ、篤ニ大學タルノ使命ヲ尊重シ進デ研究科ノ振興ニ達意シ、之ガ完全ナル發達ヲ冀望シ、以テ學術ノ蘊奧ヲ極メンコトヲ期セリ。逐日篤學ノ士笈ヲ負テ母學研究室ヲ訪ヒ、贊ヲ薦メルモノ頗ル多キヲ加フルニ至ル、之ガ指導ニ任ズル教授モ奮勵勉大ニ研磋ノ實ヲ獎ツ、アリ、從テ各教室ヨリ發表セラル、精研ナル業績ハ、日ニ月ニ多キヲ加ヘタルハ、誠ニ本學ノ爲ニ將又本邦醫學ノ爲ニ慶欣ニ耐ヘザル所ナリ。

然ニ爾來本學ニ於テ之ガ發表機關ヲ欲キ、僅ニ學友會ヨリスル不定時發刊ノ雜誌アルニ過ズ、爲ニ學内ノ有識常ニ此點ヲ遺憾トシ、純學術雜誌ノ定期發刊ヲ翹望スルヤ時久シ、時恰モ曩ニ退職セラレタル前學長小川博士ハ其記念トシテ巨額ノ金圓ヲ、本學獎學基金ニ寄與セラレ、之ヲ以テ雜誌經營ノ補資トシ、純學術雜誌ノ定時刊行ヲ慫慂セラレタリ。茲ニ於テ學内有志相謀リ本會ヲ創立セシコトヲ企圖シ直ニ議熟ス。次ニ學外有志ニ其意ノアル所ヲ齎シ贊同ヲ求メタルニ、悉ク双手ヲ舉テ協贊ノ意ヲ示サレタリ、仍テ發起人ヲ定メ、設立ノ趣旨、會則、事業方針等ヲ樹テ、檄ヲ全學友並ニ本學緣故ノ關係諸彦ニ寄テ其人會ヲ勸誘セシニ、母學ヲ熱愛シ學術ノ興隆ヲ希フ諸賢ノ後援ハ、期セズシテ翕然ト聚リ、會員壹千以上ヲ算スルコトヲ得タリ。斯テ彌々本會ハ其創設ヲ告グ。依テ本會事業方針ノ要旨ニ基キ、本誌第壹卷第壹号ヲ發刊シテ、茲ニ世界學壇ノ舞臺ニ其活躍ヲ肆ニセント欲スルモノナリ。冀ク巴昭和改元ノ初頭ニ於テ、多大ノ抱懷ト澁漉タル意氣ヲ以テ生レタル、本誌ノ前途洋々タル發達ト泰々タル隆昌ヲ祝福シテ止マザルモノナ

リ。聊カ本會創立ノ由來ト其趣旨ヲ記叙シテ本誌發刊ノ辭ト爲ス。云爾

本誌名題ハ多年學友會ヨリ發行サレタル雜誌名ヲ襲踏シ、京都府立醫科大學雜誌 *Mitteilungen aus der medizinischen Akademie zu Kyoto* ト稱ス、然ドモ發刊ノ趣旨、外觀、内容ハ純然更新シタル純學術雜誌ナリ、仍テ卷ヲ改メ第壹卷第壹號ト爲ス、サレド因緣久シキ前雜誌トノ連系ヲ絶ツハ、索引照合ニ不便多キヲ鑑ミ、特ニ通号ヲ附テ第百〇四號トス。

更新セラレタル本誌發刊ニ係テハ前陳ノ如ク、前學長小川博士ニ負フ所甚ダ大ナリ、特ニ本號ヲ以テ同博士退職記念號ト爲シ、謹テ茲ニ敬意ヲ表ス。

昭和二年五月

京都府立醫科大學學術研究會創立委員

角	田	隆
常	岡	良
後	藤	基
中	村	登
梅	原	信
		正

學術研究會は、六月十二日の發會式當日迄に壹千貳百餘名の會員を得たと、淺山會長の式辭に述べてある。

三月、山形高等學校教授に轉任のため退職した豫科教授宇野喜代之介の後任として、文學士武田鐵五郎（獨語）及び豫科生物學増強のため理學士北上四郎の兩名、四月に豫科講師を囑託せられ、六月十三日、豫科教授鶴田多八病死した。

八月、本學變災豫防委員會規程が出来て、委員を囑託し委員會が設けられた。本學、花園分院、豫科を對象とする此規定は、委員會の組織、管掌事項等を六條に亘つて規定し、同時に、其の實際活動を指針する變災救護心得十八條も制定せられた。

九月、教授河村叶一、公立學校職員分限令第八條第五號に依り休職を命ぜられ、附屬醫院第一外科部長の職を免ぜられた。十月、公立高等女學校教授文學士顯原退藏、曩に死去したる鶴田教授の後任として來任、國語を擔當。十一月には、河村教授の後任として、長崎醫科大學教授望月成人、本學教授に任ぜられ、十二月、附屬醫院第一外科部長を命ぜられた。

昭和三年に入り、一月、講師柏井忠安、助教授（眼科）に任ぜられ、二月には助教授高橋義行病死した。

三月、第二回卒業式舉行、學士試験合格證書を授與せられたもの七十三名。同月、豫科講師北上四郎及武田鐵五郎、豫科教授に任ぜられた。

四月、教授山田一夫、歐米各國へ出張視察を命ぜられ同年十月歸朝した。同月、助教授勝義孝、教授に任ぜられ解剖學を擔當。助教授後藤五郎、教授に任ぜられ理學的診療科學を擔當することとなつた。本學に於ける理學的診療は、遠く明治卅八年、京都府立醫學專門學校時代、當時の教諭池田廉一郎（附屬療病院外科部長）の時に、外科にレントゲン裝置をしたのが始めであつて、其後ずつと外科教室主管の下に、逐次設備も擴充せられて來たのであるが、醫學の進歩は何時迄も診療科の從屬的存在を容さず、後藤五郎、東大醫學部眞鍋教室の見學を終えて歸學するや、大正十五年七月、レントゲン科の獨立を見、同氏が部長を命ぜられた事は曩に一言したところであるが、今回、更に理學的診療科學が獨立の講座として發祥、後藤教授の任命を見たのである。尙、此理學的診療科は昭和廿四年四月、放

射線科と改稱せられた。昭和廿六年十月竣工せる放射性同位元素研究室の運営委員の一人として、後藤教授も加わり今日に及んでいる。

同じ四月、講師瀧山耐、助教授（産婦人科學）に任命された。

同年五月二日、幹事中道貫一死亡す。同氏は醫專時代からの幹事で、陞格當時は勿論、草創時代を通じて克く學長を扶けて拮据經營、本學の整備發展の基礎を築いた。特に陞格後も、事毎に他の府立學校並に本學を視たがる府の學務當局と隱忍克く折衝し、大學の本質を理解せしむるに到つた努力は高く買うべきであつて、兎角、府から轉入した人間は大學の人間になりきれぬ傾向があるうちで異彩を放っている。

こんな話がある。陞格翌年の豫算案折衝の時のこと、圖書購入費について「京都府立圖書館でさえも一カ年の圖書購入費は三千圓しかないのに、醫大一校でそれ以上の圖書購入費を見積るとは云々」と府の當局は難色を示した時、中道幹事は、諄々として府立圖書館と大學圖書館との本質的相違を説いて説服した。又、入學試験委員手當の問題でも「府立一中でも入學試験委員には手當を支給して居ないから出せぬ」との異議に、三高其他から得た資料を示して、府立一中と本學とを同一視する事の不可なる所以を説服した。爾來、金額は兎も角、官立同様に支給せらるる道を築いた。又、中學校の教員と比較して、本學教授の講義時間數の少いことに不服を述べたがる府當局に、大學教授の講義というものがどんなものかを繼々説いたりした。

こういう、今日から見れば些細な事にしか見えない事で、案外後の整備發展に大きく影響するいろ／＼な問題で、よく折衝を諍らず、整備發展の基礎を築いた功績は認めねばならない。

同じ月、講師伊東金四郎、助教授（内科學）に任ぜられた。八月、中西喜一郎、幹事事務取扱を囑託せられ、庶務

部長を命ぜられた。

九月三十日、教授三浦操一郎病死した。

十一月三日、明治節制定後第一回拜賀式舉行せられた。

七日、教授吉川順治、急病にて死去した。

十日、今上陛下即位禮當日、職員學生生徒一同講堂に於て奉祝式を挙げ、勤績者表彰式を行つた。十六日の大饗第一日の儀には、學長淺山忠愛參列した。學内の地方賜饌有資格者は平安神宮内の賜饌場に參列し、學生生徒は京都府學務課主催の中等學校以上の聯合奉祝大提灯行列に參加した。

此の月、教授鈴木正次、願に依り退職し、附屬醫院第二外科部長を免ぜられた。十二月に入り、助教授齋藤二郎、教授に任ぜられ小兒科學擔當、附屬醫院小兒科部長を命ぜられた。

此月十五日、久邇宮家より御下賜せられたる金一封を以て、本館屋上に建設せる御眞影奉安庫落成に付、清祓式並奉遷式を舉行した。

幹事事務取扱中西喜一郎、大學幹事に任ぜられたのも、長崎醫科大學教授横田浩吉が本學教授に任ぜられ外科學を擔當し、附屬醫院外科第二部長を命ぜられたのも此月である。

昭和四年に入り、二月、休職教授河村叶一、願に依り本職を免ぜられ、同月、助手細田孟（內科學）、同田村眞男（皮膚泌尿器科學）共に助教授に任ぜられ、三月、胃腸科副部長川井銀之助、胃腸科部長代理を命ぜられた。

同じく三月、第三回卒業式舉行、當日學士試験合格證書を授與せられた者七十一名。

五月、教授勝義孝、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、昭和五年三月歸朝した。

豫て校庭南側に新築中の中央圖書館、五月十五日に竣工したるに付、六月三日、府當局、府會議員等を招待して披露の祝宴を催した。該建物は鐵筋コンクリート三階建て、地階は學生扣所・體育場、一階は普通教室、二階は中央圖書館、三階は階段教室二室よりなり、一階の普通教室の一に教務課が本館より移轉、總延坪五七九・六に及び、建造には一五二、一四五圓を要した。

曆目的には前後するが、一代の風雲兒、刀圭界の先輩の一人後藤新平が、其の多彩なる一生を終えたのは、昭和四年四月十三日午前五時三十一分、吾大學の附屬醫院第十六號舎に於てであつた。同氏は、岡山へ西下の途中車中にて腦溢血にて倒れ、偶々同じ列車に乗合せた本學出身の瀧孝雄の應急處置を受けた上、本學附屬醫院飯塚内科に入院、部長飯塚直彦始め院長淺山忠愛、副部長伊東金四郎等の努力も空しく、其の波瀾萬丈、華かな生涯の幕を閉じたのであつた。

從來本學には公式に學旗の制定がなかつたが、此年五月、學旗が制定せられた。世界の大勢の趨く處、時局の尖鋭化に伴い、所謂國家總動員の聲高く、軍事教練は彌々強化の一途を辿り、御親開始團體行動の行事が頻繁になつて來て、其都度學旗も一役を賣うことになつたのである。

却説、昭和四年七月には、教授兼學生監常岡良三、願に依り學生監を免ぜられ、教授後藤藤基幸、學生監兼任を命ぜられた。

此月、京都府立醫科大學の職員學生生徒に對し學事上其他の便宜を圖り、且患者の賑恤及諸種の便益を行う目的で、本學内に於て財團法人昭和會を組織し、二十五條に亘る寄附行爲を制定し文部省の免許を受けた。條例に基き、

會長（京都府立醫科大學長）、副會長（京都府立醫科大學附屬醫院長）以下諸役員の就任と共に直に事業を開始し、所期の目的達成のため活躍、連綿として今日に到り多大の功果を擧げている。

八月、教授常岡良三、歐米各國へ出張視察を命ぜられた。

九月、學友會規則の改正あり。これは大正十一年四月、從來の京都府立醫學專門學校校友會が、陞格後京都府立醫科大學學友會と改稱せられた時制定せられて以來（當時はまだ京都府立醫學專門學校が存在していた）始めての改正である。

昭和五年に入り、三月、第四回卒業式舉行せられ、六十八名に學士試験合格證書が授與せられた。

同月、助教授松永周三郎、依願退職した。五月、講師來須正男、助教授（外科學）に任ぜられた。

整備時代に於て外部に表われた最も大きな仕事は病舎の改築である。時恰も鴨堤の東、京大醫學部附屬醫院に於ても、先頃より病舎の改築事業が始つて居た。鴨堤の西畔、本學に於ても、時到り機熟して、愈、病舎改築工事に着手する事になつた。全工事を六期にわかし、其の第一期工事が此月即ち五月に起工された。第九・十・十一號舎の改築である。

七月、助教授瀧山耐、依願退職した。

十月には教育勅語煥發四十年記念式が行われた。

十一月、講師藤田登、助教授（外科學）に新任。

整備事業も漸く軌道に乗つて走り出して來た昭和六年に入つて、異常な事件が二つ起つた。其の一つはさきに大阪

の府立醫大や愛知縣立醫大が官立に移管せられて、夫々、大阪帝大醫學部、名古屋醫科大學となり、又既に二年前熊本の縣立醫大が官立に移管されて官立熊本醫科大學となっており、由緒ある四公立醫科大學中三つ迄が公立の線より没落した事に刺激されて、教授間に官立移管の聲を擧げる者が出て、官立移管研究委員會なるものが出來た事である。一時は全教授の意向の如く傳えられ、學生の同調さえ得れば官立移管は可能なるかの如き形勢を見せた。筆者も大學の前途に關心を持つ學生及び卒業生數者から愚見を求められた時、内務省から文部省に移管せられた傳染病研究所が東大に吸収せられた例を擧げ、本學中興の祖故島村博士の志を空しくせざる様自重を要望したのであつたが、大學の經營は官立になつたからとて經濟上の制約は決して緩和されない。それに熊本と京都とは經濟的の事情以外は全然事情が違ふ。京都府立醫科大學は京都唯一の最高學府ではない。官立大學教授は府立大學教授より、帝大教授は官立大學教授より社會的地位が高いなどと考えるのは封建時代の殘滓を嘗めるもの、インフイリオリティー・コンプレックスの至す處に外ならない。然し學生は成長して居た。三高生が多く乗車して居る電車に、單獨で乗車するのを躊躇した者があつた陸格當初の風景も見られなくなり、「官立を受ける自信がなかつたから醫大を受験した」などのインフイリオリティー・コンプレックスの露出はなくなつて來ていた學生の視野は、廣く眞直になつて來ている。且、當初全教授の意向の如く傳えられた此問題も、百八十萬府民との連繫深き本學成立の歴史に鑑み、傳統の精神に生きる教授連の廣き視野よりの意見が大勢を制するに到り、委員會も二回程開會したるのみにて、移管不可の結論を出して解散、此問題は日の目を見ずに終り、公立醫大の線は遂に破れずに全國唯一の公立醫科大學となつた。此問題は、三月の第五回本業式前にはすつかり霧消して終つた。

第二の事件と云うのは、府當局に由つてまき起された豫科廢止問題である。此年即ち昭和六年八月頃、府會の府立女子高等教育機關設置の要望に應えて、京都府立女子專門學校を設置する事になり、府は其の校舍敷地の物色に當り、花園の豫科の校舍敷地に白羽の矢をたてた。時の京都府知事佐上信一は、「豫科を廢止して、大學は學生を高等學校卒業生から採ればよい。豫科廢止に依つて生ずる經費の餘裕は、これを大學の研究費擴充費に使うことが出来る。そして豫科の跡に女子專門學校を設置する。敷地の購入費も校舎の建築費もいらない。正に一石三鳥否四鳥だ」と、或日新聞記者會見で得々と一席ぶつた。忽ち府下の有力新聞に一齊に報道された。此の佐上知事の聲明は、學園の内外に取つて正に晴天の霹靂で、職員學生生徒の驚愕は著しく、殊に官立移管研究委員會の事件が終末を告げた後の事として學生生徒の動搖の兆あり、淺山學長、新任學生主事越智眞逸（職制の改正により従前の學生監は學生主事と改稱、八月、兼任學生主事後藤基幸願に依り兼職を免ぜられ、教授越智眞逸、學生主事兼任を命ぜられた）、佐々木豫科主事、中西幹事等、事は事前に何等府當局と大學との交渉なく突如として新聞紙上に發表せられた事件であり、よく事態を靜觀して善處すべきを説き、夫々、學生生徒職員に對して、輕舉盲動する事なく自重すべき事を要望した。本學の歴史を無視し豫科誕生の經緯を蔑み、机上にて唯數字相手に所謂行政的手腕を發揮して組み立てた「一石四鳥」案が、事、教育の殿堂に關しては、他の事業の立案の如くスラ／＼實行に移し得る筈はなく、愈々、具體的に話が始ると、人間精神の發達を無視し教育の根本義を缺いていた此の「一石四鳥」案は輿論の壁に衝き當つて終つた。「豫科の敷地は大學出身者の愛校の精神の結晶である」と云うが、一旦寄附を受けた以上は、其の處置は管理者たる自分の自由である」と、最初豪語し、「一石四鳥」を自讃していた、所謂「能吏」型の府尹佐上信一も、此輿論の壁に衝

き當つたところ、流石、機を見るに敏なる佐上知事は今更の如く本學の歴史を口にして、其の自讃せる「一石四鳥」案を引込めて終つた。これで一時世間を騒がし、吾學園をゆすぶつた豫科廢止案も、さきの官立移管研究の事件と同様に日の目を見ずに終焉した。此問題に對する大學當局の善處と、職員學生生徒一同の自重と、本學出身者の熱烈なる愛校の努力とが相須つて輿論の壁を築き上げた結果に外ならない。此の昭和六年に於ける二事件の、一は學内に發し、他の一つは學外より惹起せられたものである。此兩者の間に微妙なる示唆を感じるものは獨り筆者のみではあるまい。

却説、例に由つて昭和六年中の主な事項の列舉に移る。

二月、助教授田村眞男、願に依り退職した。

三月、恒例に由り第五回卒業式を舉行、當日學士試験合格證書を授與せられたるもの六十六名。

教授久保昱二郎、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、同年十二月歸朝した。教授横田浩吉も亦歐米各國へ出張視察を命ぜられ、同年十一月歸朝した。助教授藤田登、願に依り退職した。豫科教授額原退藏、京都帝國大學助教授に轉任のため依願退職し、四月、成城高等學校教授文學士佐伯梅友、さきに京大に轉じたる額原退藏の後任として豫科教授に任ぜられ、國語學を擔當。六月、講師兒玉邦男（解剖學）、同井貫耕平（小兒科學）、同今津久右衛門（外科學）何れも助教授に任ぜられた。同じ月、豫科教授宮田一、滿洲へ出張を命ぜらる。

八月、昨五年五月起工せる病舎改築第一期工事竣工した。鐵筋コンクリート三階建、延七八〇・四九坪、これに要した工費二四六、〇〇〇圓。

十一月創立六十年及大學陸格十周年祝典を舉行、久邇宮多嘉王殿下の臺臨を始め、府・市の來賓及び卒業生諸氏多數の參列を得て盛典を極めた。

昭和七年に入り、一月、教授後藤五郎、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、同年十一月歸朝した。

三月、第六回卒業式舉行せられ、六十八名に學士試験合格證書が授與された。

五月、講師加藤明敏、助教授（微生物學）に任ぜらる。

六月、學長淺山忠愛、歐米各國へ出張を命ぜられ、八年一月歸朝。學長外國出張中、教授角田隆が學長代理を命ぜられた。同じ月、講師志多半三郎、助教授（産婦人科學）に任ぜられた。

七月、病舎改築第二期工事起工。今回の改築は第九・十・十一號舎の殘部、第十二・十三・十五・十六號の各病舎の改築である。

昭和八年に入り、三月、恒例の卒業式舉行、今回は其の第七回に當り、六十四名に學士試験合格證書授與せらる。

四月、教授中村登、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、同年九月歸朝。同月、講師牛篠武男、助教授（商科學）に任ぜられた。

八月、昨昭和七年七月起工せる病舎改築第二期工事此月竣工、第一期工事と同様なる建築様式にて、延八六八・三五坪に及び工費二三〇、〇〇〇圓を要した。

同月、産婆看護婦教習所規則中一部改正の件認可せられた。大正十三年十月、醫專附屬産婆看護婦教習所が京都府立醫科大學附屬産婆看護婦教習所と改稱せられて以來最初の改正である。尙此の教習所規則は終戦後發展的解消を遂

ぐる迄に、昭和十四年にも昭和十六年にも一部改正があつた。

九月、病舎改築第三期工事起工。今回は、第十二・十三・十五・十六號舎の殘部と、特等病舎の改築を行うものである。

昭和九年の初頭、京都驛に於て、群衆の無節制無秩序に起因せる多數の壓死者、負傷者を出せる遭難事件あり。本學に於ても多數の罹災者を附屬醫院に收容救護した。

三月、第八回卒業式を舉行、七十七名に學士試験合格證書授與せらる。

同月、講師赤野六郎、助教授（衛生學）に任ぜらる。同じ月、教授梅原信正、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、同年十二月歸朝。四月、助教授赤野六郎、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、十年九月歸朝した。

同月、六箇條より成る京都府立醫科大學豫科指導教授規定が制定せられ、四月十一日より實施された。此指導教授制は、各指導教授は其擔任する生徒（二十五名以内）の豫科在學中、素行、學業、健康等に關し、組擔任教授、學生主事、配屬將校及び父兄と常に連絡して輔導監督の任に當り、豫科學則第一條の主旨に基き、訓育の徹底を期するために設けられたもので、指導教授には豫科教授全員が是に當つた。此制度は、後年學制の改革により豫科が廢止せらるる迄續いた。

五月、花園分院に外科・内科の二科を設置し診療を開始した。レントゲンも裝備した。分院長には教授久保昱二郎、内科醫長には講師西村利雄、外科醫長には同櫻井雅四郎がそれぞれ補せられた。

同じ月、結核病研究費として、中江龍二より國庫債券額面壹萬圓の寄附あり。

七月、病舎改築第三期工事竣工。四階建の巍然たる鐵筋コンクリートの病舎鴨堤に聳立した。延坪一、六〇四・三五、總工費三五〇、〇〇〇圓。

九月、此月二十一日近畿地方に未曾有の大風水害あり。本學附屬醫院にも多數の罹災者及び兒童を收容し、各方面に救護班を派遣して救護に努めた。

十月、助教授柏井忠安、願に依り退職した。十一月、講師松岡龍三郎、助教授（神經精神科學）に新任。

昭和十年一月、病舎改築第四期工事起工、第七・八號兩病舎の改築である。

同月、教授越智眞逸、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、同年八月歸朝。二月、教授兼學生主事越智眞逸は願に依り兼職を免ぜられ、代つて教授勝義孝が學生主事に兼任された。

三月、第九回卒業式舉行せられ、七十三名に學士試験合格證書が授與された。

五月、講師鈴木成美、助教授（皮膚泌尿器科）に任ぜられた。同月、教授後藤基幸、歐洲及南洋諸島へ出張視察を命ぜられた。

六月、此月二十九日、大豪雨襲來、京都市内各河川氾濫、各所に被害續出し、罹災者多數を極めたるを以て、救護班を派遣して救護に努めた。

十一月、病舎改築第四期工事竣工。さきに竣工せる第三期工事同様、堂々たる四階建の頑丈な建築で、延一、〇四八・三〇坪、工費二四一、〇四〇圓を要した。

昭和十一年一月、講師弓削經一、助教授（眼科學）に任ぜられた。

三月、第十回卒業式舉行、今回學士試驗合格證書を授與せられたる者八十四名。

同月、助教兒玉邦男、依願退職した。豫科教授高坂正顯、東京文理科大學助教に轉任し、同森島三郎、依願退職した。また此月二十二日には、助教本田郁也病死した。

同じ月、隔離病舎改築に付地鎮祭が行われている。これは、病舎改築工事の第五期に當るものである。

四月、豫科には從來生徒のための圖書室の設けなく、教育上多大なる不備を歎いていたが、多年の要望こゝに結實して、校内西南隅の地を卜して圖書館を建設することとなり、此月吉日を卜して地鎮祭を行い、六月、其の竣工を見た。二階建木造建築にて、階上に閱覽室・書庫等を設け、階下の廣間は校内食堂として使用する事にし、圖書は、豫科教育の本質に鑑み、生徒教養に資するものを主として購入設備し、是が指導は、豫科教授中一人圖書主任となつて之に當つた。

同じ月、講師荒木正哉、助教（病理學）に任ぜられ、同小島不二雄、助教（解剖學）に任ぜらる。

七月四日、學長兼教授並に附屬醫院院長淺山忠愛は、願に依り學長及附屬醫院長を退職し、教授専任となり、代つて、教授角田隆、學長兼教授に任ぜられ、教授中村登、附屬醫院長に補せられた。この時より學長と附屬醫院長との職は、醫專以來の例を廢し分離する事となつた。

第三期 戦争時代

昭和六年九月十八日夜、滿洲の柳條溝の滿鐵線路爆破に端を發した、所謂、滿洲事變は益々擴大せられ、滿洲國の

誕生を見、火は西へ西へと延びて遂に北支に及び、昭和十二年七月八日深夜、蘆溝橋の眠を破つた銃聲に、所謂、宣



角 田 隆

戰布告のなき戰爭、日支事變に突入して終つた。角田學長就任の昭和十一年七月を以て戰爭時代の初頭と劃するのは異議の餘地があるとは思ふが、實質的には亡國列車が「非常時」「國家總動員」等の聲に送られて、汽笛一聲柳條溝を出發してから無條件降伏谷への没落の一路、悲劇街道を盲進していたのであるから、既に戰爭は始つていたのである。大正十五年八月學長に就任以來、整備事業も一應軌道に乗せて學長の職を退いた前學長淺山忠愛と、新學長との交代の時以後を戰爭時代と劃しても強ち不當では

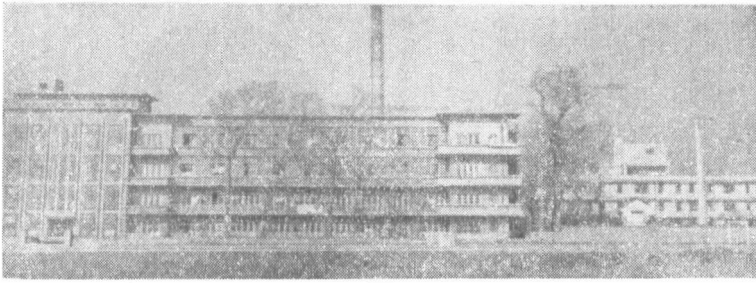
あるまい。

同月、隔離病舎（北病舎）の改築竣工して、清楚な白色三階建が河原町通りに出現した。十月三十一日に内外の關係者を招いで披露した。延九七九・三〇坪、所要工費二七三、二八八圓。

十二月、教授藤原謙造、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、十二年九月歸朝した。同月、助教授川井銀之助、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、十三年四月歸朝した。

昭和十二年一月、豫科講師理學博士荒木新太郎、文學士下程勇吉、豫科教授に任ぜられ、荒木教授は化學、下程教授は修身及獨逸語を擔當。

三月、第十回卒業式舉行、此時、學士試験合格證書を受領せる者六十六名。



新病舎全貌

同月、教授越智眞逸、中華民國へ出張し四月歸京す。四月、助教授小島不二雄、依願退職し、助教授赤野六郎、教授に任ぜられ衛生學を擔當する事となつた。五月、教授望月成人、歐米各國へ出張視察を命ぜられ、同年十二月歸朝した。同月、講師田中秋三、助教授（病理學）に任ぜらる。

昭和十三年二月、病舎改築第六期工事起工。

三月第十二回卒業式舉行、七十四名に學士試験合格證書を授與した。

五月、市内大日山の本學墓地の碑文「學用患者之墓」とありしを「俱會一處」と改刻し、また新に有志により「研究動物諸靈供養塔」が一隅に建立せられた。

同月、講師館石叔、助教授（內科學）に任ぜられた。

七月、大正十五年七月助教授（耳鼻咽喉科學）に任ぜられた富岡末吉死亡した。

八月、教授山田一夫、滿洲國及中華民國へ出張を命ぜられた。また、教授本永七三郎、願に依り退職したのも此月である。

十一月、本年二月起工した病舎改築第六期工事（第十七・十八（一部殘置）・十九・二十號の四病舎）竣工した。延七二一・六六七坪、所要工費二〇〇、四五二圓。鐵筋コンクリートの四階建である。昭和五年五月、第一期工事起工以來、近世式鐵筋コンクリート造病舎改築工事は、八年の歳月と總額約百六拾有餘萬圓を投じて、茲に完



竣工を見た

了したのである。

十二月、講師井尻萬太郎、齒科部長を命ぜらる。

昭和十四年一月、助教授井貫耕平、依願退職した。

三月、第十三回卒業式舉行、今回の學士試験合格證書受領者八十三名。

同月、教授兼學生主事勝義孝、願に依り兼職を免ぜられ、教授藤井猪十郎、代つて學生主事を兼任す。

五月、教授島田吉三郎、依願退職した。島田教授の退職は、既に帝國大學に於て内規により實施せられている停年制に倣ひ、本學に於ても内規に依り定年制（六十三歳を以て定年とす。尙本學に於ては停年と稱えず定年と云う）を布く事に最近決定し、其の最初の退職であつて、盛大なる定年式を以て之を送つた。

同月、附屬醫院に於て細菌學的及血清學的検査をなすため細菌検査所が設けられた。所長は規程（四力條よりなる）に由り本學教授中より學長が囑託する事となる。

初代所長は教授常岡良三。

六月、教授後藤基幸、學術研究會議議員仰付けらる。

同月、講師中村文雄、助教授（耳鼻咽喉科學）に新任。

八月、助教授松岡龍三郎、興亞勤勞報國隊派遣指導教官を委囑せられ、中華民國及

蒙古へ出張を命ぜらる。全國軍國主義の色彩彌々濃厚となる。

同じ八月、教授望月成人、滿洲國及中華民國へ出張を命ぜらる。

學長兼教授角田隆、定年につき、願に依り本職並兼職を免ぜられ、教授

常岡良三、代つて學長兼教授に任ぜらる。教授中村登、願に依り附屬醫院長を免ぜられて教授専任となり、教授藤原謙造、附屬醫院長に補せられた。

此月、豫科では、本館の東端に接續して鍵形に南折増築工事に着手した。

十月、豫科教授東儀正、滿洲國及中華民國へ出張を命ぜられ、十一月、

豫科教授宮田一、中華民國（中文）へ出張を命ぜらる。

昭和十五年三月、第十四回卒業式舉行、六十五名に對し學士試験合格證書を授與した。

四月、文部大臣の認可を得て、豫科入學定員從來八十名なりしを百名に増員することとし、直に實施した。此の増員は、時局の進展に伴い後更に百二十名に擴張せられた。

七月、助教授今津久右衛門、滿洲國へ出張、第二回學生報國隊醫療班を指導した。

八月、去る三月起工した豫科教室増築工事（三教室・一會議室）が竣工した。延五二・三三四坪、建築費三萬圓を要した。



三 良 岡 常

同月、教授飯塚直彦、豫科教授北上四郎、滿洲國及中華民國へ出張を命ぜらる。また、助教授伊東金四郎、依願退職した。

九月、京都府立醫科大學學歌が新に制定された。「連日の夢の」で始まる醫專時代からの校歌が、陞格後も引き續き、學歌として公私の席上唱歌せられて來たのであるが、皇紀二千六百年を期し新に學歌を制定すべしとの聲高く揚り、茲に、新學歌の誕生を見るに到つたのである。

校章——學章の制定の時の例に倣い、最初學内一般に公募し、應募作品を學歌選定委員會（委員は豫科本科教授中より選出）の審



伊良子清白

査に附したのであるが、かなり多數の應募ありたるにもかゝらず、大學の新學歌としてふさわしい力作がなく、佳作五篇を得たるに止つた。仍て本學の出身で、詩壇に於て河井醉茗、横瀬夜雨と共に「文庫派の三詩人」として明治の文學史上に不朽の名を止め、珠玉の十八篇を藏する其の詩集「孔雀船」は古典として永遠の生命を保つ伊良子清白（本名輝造、明治卅二年卒業）に作詞を委嘱する事になつた。應募作品の選歌を擔當したのは外ならぬ伊良子清白であつたので、同氏は最初固辭して受けなかつたが、選定委員會の強き熱意と支持に動かされて、「へたの上手の問題でなく一死報國の覺悟」で遂に委嘱を受けて力作、數回の推敲添削を経て茲に「比叡は明けたり鴨の水」で始まる新學歌が出來た。此間の経緯に就いては、昭和廿二年三月發行の京都府立醫科大學文藝部の「雪まつり」創刊号（伊良子清白特輯号）中、山田重正（昭和四年本學卒業）の「伊良子清白先生の尺牘より」に委しく述べられてゐる。「所謂文庫調の『莊嚴美麗の樓宮』であり、『溫柔清婉』な味ひでもある。高き藝術的水準を示した……比類なき學歌……」之を要するに先生の晩年に於ける隨一の作品であると思ふ」と山田重正は評して居る。

歌

服部 正作曲

4 *mf*

1. ひかみ刀 えきよミ はナヤト あルハス けマヅム リルのノ かカモユ もつらキ ムウツツ *mp* すとりり がきせイ

2. 3. 4. たノんコ てケのケ ーンはン リジナノ げマイオ ムユマシ とアタヘ しガキア てルテリ ませまい こいどク のノにニ とハカ一 あゲにヘ

Grave

くせいド じゃーれウ たノんコ てケのケ ーンはン リジナノ げマイオ ムユマシ とアタヘ しガキア てルテリ ませまい こいどク のノにニ とハカ一 あゲにヘ

Grave

かフ(ホ) ーホー くウホア しケムケ ーのの びのの のかいノ とンロニ いがとモ のうはユ ちーの マのル とイガナ もノクシ 一ウホレ クのラ とシカサ

Grave

こがサ ーセヤゲ リキキキ マノハス ほチミメ しマビグ ーのの のタリミ ーはぜタイ ン二の ーレカハア ーむのの ーはたタイ ーな二の ーつにア ーちじカ をロのア やキハカ くヌシト

京都府立醫科大學八十年史

三六二

一、比叡は明けたり鴨の水

學城立てり儼として

真理の證神祕の扉

星の命の短少富貴にして

鐘鳥る白晝かうかう

橘井の健兒眉昂る

制覇の業を受け継が

豪邁の歌磔石の

巷の風に轟きぬ

見よ夕暮の空の月

國
か
て
勾
糸
史
の
色

永久の學府の榮光は

緑の旗の虹の橋

神と澄むもの雪祭り

醫道古賢の教あり

生養の日の暁に

二 慈の愛の赤白と

仁慈の愛の赫灼と

作曲は初め東京音樂學校の橋本國彦に依頼したところ、いろいろのいきさつがあり伊良子清白の不滿を買い、橋本を斷り、清白の委囑により服部正に依頼した。服部は當時三十三歳、感激して之を引受け作曲した。同氏は慶應義塾大學經濟學部出身、在學中大學マンドリン・オーケストラに在り。音樂は菅原明郎に師事し、青年日本交響樂團指揮者として活躍、映画音樂に多く携わり、作品は管絃樂曲、歌曲を主として、其の數多く、今日尙活躍を續け、吾々はNHKなどの放送を通じて、しばしば同氏の活動に接している。

昭和十五年十一月十六日、大學本館の露臺に立つた伊良子清白の前に、全學の學生が新學歌「比叡は明けたり」を唱和した時、老詩人の眼は感激の涙に濡れたと云う。我が伊良子清白は、昭和二十一年一月十日、三重縣度會郡七保村の村醫として往診の途上、腦溢血で仆れ七十年の生涯を閉じた。醫師伊良子暉造、醫の天職に殉じて亡びたけれども、詩人伊良子清白は永久に亡びず、其の母校のためにものせる學歌は、大學の存する限り永遠に唱和せらるるであらう。

昭和十五年十月卅日、教育勅語發布五十周年に當り、學長常岡良三、教授淺山忠愛、同中村登、豫科教授佐々木宗要の四名は、多年教育に従事し功勞顯著なる廉に由り文部大臣より表彰せられた。

十一月十日、學長以下二十名、紀元二千六百年式典並に翌十一日の奉祝會に參列のため上京、學内に於ては、職員、學生、生徒、看護婦等、本館前庭にて川井助教授司會の下に舉式し、後京都皇宮建禮門前にて拜禮の上平安神宮に參拜した。

十二月、助教授今井甚吉、豫科教授に任ぜられ翌日依願本職を免ぜられた。

昭和十六年は、日本が其の悲劇の最後の幕に没入した年である。

二月、講師角本永一（内科學）、同山田博（解剖學）、助教授に任ぜらる。

三月、第十五回卒業式舉行、當日學士試験合格證書を授與せられたる者六十七名。

四月、講師井尻萬太郎、助教授（齒科學）に任ぜられた。

四月、豫ねて昭和十年及同十五年の兩度に、合計八九、一八二圓を投じて買收擴張せる附屬醫院北部の敷地七二・九一坪の地に、看護婦寄宿舎移轉改築工事に着手す。同じ月、學友會會則を改正し、又、八章三十八條より成る京都府立醫科大學奉公會會則が制定せられ直に施行せられた。此の看護婦寄宿舎移轉改築は學友會の事業と關聯してゐる。京都府醫學專門學校校友會が、陞格後京都府立醫科大學學友會と改稱して、卒業生、學生、生徒、職員等より成る會員相互の親睦を圖ると共に、本學の事業に協力後援する本來の目的の達成に活躍を續け、昭和四年、學生監後藤基幸の時代に會則の改正のあつた事は既に述べた所であるが、此會則改正に由り後藤學生監が學友會理事長に就任、學友會は一層組織だつた活躍をする事になつた。

體育部、文化部の各部の活躍を此處に詳説する紙面を持たないが、講演部の夏季巡回講演旅行は、遠く、大正十四年に、部長梅原信正、自ら陣頭に立ちて、臨床學部の醫學映画をも携えて府下主要町村に實施したるを手始めに、連年府下並に近縣——滋賀、福井——等に及び、又、大正十二年の六月と七月に、小川學長の一行及び淺山教授の一行によりて奥丹地方に實施せられたる府下巡回診療の其後中絶し居たるを、「無醫村診療」と形を變えて講演部の幹旋の下に行わるるに到り、この無醫村診療隊の活躍は獨り府下近縣に止まらず、鳥取、香川縣等にも及んだ。戦時中の人員窮乏の際は例外として、時に斷續あつたけれども終戦後にも出動して居る。

新聞部の活躍また華々しく、昭和三年四月十五日京都府立醫科大學新聞第一號發行以來、日本華かなりし時代を通じ克く學生新聞の使命を果し、我國學生新聞界の重鎮となり、敗戦間近く物資窮乏の裡にもよく頑張りを續けて來たが、終に昭和十九年十二月廿三日第一八五號を以て終刊となつた。

京都府立醫科大學雜誌が純然たる學術發表機關と化したため、文藝愛好の士は大學新聞の外、更に同人雜誌を持つたりした。「双丘」も其の一である。無謀なる戦争に飛び込んだ吾國の社會情勢は、其の健全なる發育に資せず、伸びずに終つた。派生的に獨逸語趣味會、佛蘭西語趣味會等が生れたが、指導者が學園を離れると共に、また、吾國の客觀的情勢に災いされて、充分なる發達を見ず終つた。然し、獨逸語趣味會は比較的長く生命を保ち、機關紙「ライトステルン」は數号を重ねている。終戦後、文藝愛好の士により「雪まつり」創刊、數号を重ね、また別に「赫土」が出ている。

音樂部の活躍また目覺しいものがある。終戦後の發達は特に目覺しく、今日京洛の屈指の管絃樂團を擁している。京都放送局が丸物屋上に假放送局を開設して居た時代に、吾マンドリン・オーケストラが放送をした當時を回顧すれば誠に隔世の感がある。

演劇部に到つては、疾くに定評のあるところで、部員の熱心なる研究は玄人はだしで、既に豫科開校記念祝賀式の際の演技など、觀客をして職業俳優と思ひ違はせた程である。戦時中は當然過激状態であつたが、終戦後再び熱心なる部員集り、目覺しい發達を來し、街頭に進出している。三十年の間隔は此處にも表われて、當初は舊劇の名残があつたが、終戦後は新劇翻譯劇が多い。

我國唯一の公立醫科大學で、また運動場を持たない唯一の公立大學である我學園の體育部の苦難は想像するに難くない。特に野球部、蹴球部に到つては、言語に絶する。他校のグラウンドや公私の施設の運動場、御苑等を使用して練習した。學園自體の運動場としては、豫科校舎の北の空地六百坪と鴨河の川原だけである。自己の修煉場を持つてゐるのは、庭球部、卓球部、劍道部、柔道部、角道部、弓道部等に過ぎない。

劍道部、柔道部は豫科本館の南に大正十二年に建設された道場（五十坪、工費七、五〇〇圓）を持ち、角道部も、同じ頃豫科校内

に土俵を築いた。弓道部の道場は、豫科校地西側に昭和十六年五月建設せられた。

プールを持たぬ水泳部は夏季水求めて修練、陸格早々、大正十一年夏には淡路島の志筑に水泳場を設け、翌大正十二年七月の開場式には、小川學長・野田水泳部長・廣木豫科主事等出席、其後豫科の東隣、京都二商にプールが出来てからは、よくそこで水を蹴つた。水泳場を求めることに先ず苦勞した水泳部も、終戦後、昭和二十六年六月、大學の貯水槽を利用して深さ一・三〇米の二五米コース七本を有するプールを持つことが出来た。

毎年水上運動會の中心をなす端艇部も、昭和十年日本漕艇協會標準型のF1・F2・F3の新艇三隻を新造、艇庫も從來の三井寺下の艇庫の外に、瀬多大橋の下流西岸に新艇庫を持ち、櫓でフォアも一隻加わり益々發展、長き休暇の際には大阪灣の週航に出た事もあり、琵琶湖週航は屢々行われている。戦時中設けられた海洋班は、後ヨット部となり、ヨット三隻を持つている。ボートもヨットも土曜日、日曜日其他休日には盛んに同好の士に利用されている。

旅行部も、夏の長き休暇を利用しては遠く日本アルプスの山々を踏破、石戸宏君の悲しむべき山の死もあつたが、昭和十年十月には比良の一角に山小屋を持つ事が出来、登山の訓練に身心の鍛鍊に、會員一般に今日引き續き盛んに利用せられている。此旅行部は、「山旅」と題する同人誌を持ち數卷つゝいた。

馬術部の活躍も物凄く、洛西常盤に厩舎と馬場を持ち、軍國の波にのつて華々しい活動をつゞけ、野外演習の時などの活躍は當時を知る人々の未だに耳目に残っている處であらう。後常盤の厩舎は失つたが、終戦後も暫く存続したが、社會混亂物資窮乏の裡に今日は其の活躍が見られない。

戦時中盛んだつた射撃部、銃剣道部等は終戦後姿を消した。

先きには愛知醫大との對抗戦、後には慈恵醫大との對抗戦に於ては、各部を擧げての競技である以上、學友會は全面的な援助を惜しまなかつた。

各部には教授が部長（實行委員長と稱した時代もある）に据つていたけれども、實際の運営は學生生徒より出た理事の活動によるものである。

昭和六年四月、藥局長兼豫科教授森益藏、後藤基幸初代理事長に代りて第二代理事長となり、昭和十七年九月吾學園を辭する迄其任にあり、後藤五郎、代つて第三代理事長となり、今日に及ぶ。

森理事長就任早々、十一月には本學創立六十周年陞格十年記念祝典を迎え、學友會は大學側の華々しき行事に参加して、創立記念日の前夜祭（十月卅一日）を日出會館（今日の新聞會館）を借切つて通俗醫學講演會を開催した。教授常岡良三の「血液型の話」同中川清の「性病とは何ぞや」の講演があつて盛會を極め、市民よりも有意義なる企として歡ばれ、此の大學の街頭進出は大成功であつた。創立記念日の當日は大學の盛んなる式典後、學友會主催にて病院裏の鴨河原にて園遊會を催し、在洛卒業生、教職員、學生等一團となつて交歡して記念日を愉快に壽いた。爾後、毎年の創立記念日には、通俗醫學講演會と園遊會とは學友會の主催する年中行事となつた。其後、講演會場は朝日會館、園遊會場は平安神宮で行わるゝ様になつた。

かゝる行事のため、又、學會參加のため等にて、地方から入洛される卒業生が大學を訪れる時の便宜や、また學友會各部の會食に簡單に利用出来る施設の必要がかねて痛感されていたが、かゝる必要を充すため大學の構内か、その近くに學友會館を設けたいとの要望が強く興り、遂に昭和八年五月の定期評議員會にて、學生理事岡本芳清等より提案せられたる學友會館建設の件は満場一致可決された。次で、淺山會長を委員長としたる學友會館建設準備委員會が結成せられ、慎重に検討の上、昭和九年一月の特別臨時評議員會の席上具體的な實行計画の發表となり、評議員會の

承認を得、實行委員會の組織となり、學の内外相呼應して七カ年計画を以て學友會館建設に着手する事になった。實行計画を具體的に述べると、

一、在學生は、七カ年間會館建設事業費として毎年五圓宛出金、別に豫科一年より本科四年迄の在學生は、夫々、學年別に五圓——二五圓の特別出資を在學中に釀出する。

一、卒業生は、七カ年間學友會費年額一圓五十錢を倍額即ち三圓とし、半額は會館建設費とする。

一、教授、助教授等の特別會員も、同様、會費を倍額とし、半額を會館建設基金とする。

一、七カ年間毎年豫科新入生は入學の際、事業資金として四五圓拂込む。

一、大學からは毎年補助金として五〇〇圓宛、七カ年で三五〇〇圓出資して貰う。

以上、合計して七カ年で一〇萬圓餘を集めて會館を建設する。

會館建設の豫定地は大學の正門前の、電車通を隔てた河原町西側の看護婦寄宿舎（現在の西構）とし、看護婦寄宿舎は大學が他の適當なる地に移轉する事とし、其の跡に三階建の鐵筋コンクリートの會館を建設、一階はホール・食堂、二階は小集會室・各部控室、三階は宿泊設備をして、卒業生、家族等の入浴の便宜に供する。

以上の計画案により、愈々、實行に着手、昭和十七年八月末森理事長辭任の際には、順調に進んで來た募金は最初の豫定額約十萬六千圓に達した。

昭和十六年四月、看護婦寄宿舎移轉改築工事が始つたのは、河原町通も電車自動車の交通量頓に増加し、看護婦の

通勤にも危険を感じずるに到り、且、建築物も腐朽し來れる折柄、會館建設の豫定地に望まれたからである。此の當初大學の内外を擧げて華々しいにり出しをした會館建設事業も、完成目標に近づくにつれ、吾國が破滅の戦に突入したため國內の諸情勢が悪化し、險惡となり、物的資源も人的資源も一切戦力に投入せらるゝ時期に、直接戦力に關係なき仕事に當てらるゝ資材も人力もなく、遂に此計画も龍頭蛇尾に終るに到つた事は返すくゝも遺憾な事である。

然し、此計画に代るものとして、昭和十九年六月、府當局と吾大學當局との熱心なる努力により、河原町東、荒神橋畔（鴨川西岸）の學士會京都支部會館の土地建物を大學が買收して、之を學友會に貸與した。學友會の立案せる會館とは程遠いものではないが、兎に角、吾等の會館として其後大いに利用され便益を得ている。所謂、吾等の會館は一四四坪の土地（此買收費一七、三四二圓）に、木造二階建、延五二・七五坪、此買收費四七、六五八圓である。買收費總計五四、九〇〇圓中、五萬圓は學友會（三萬圓）、昭和會（二萬圓）の寄附による。

學友會が大學と表裏の關係に立つて奔走した仕事も一つある。それは運動場の問題である。此の問題は大正十年陸格以來三十年、未だに解決出來ないでいる問題で、運動場を持たぬ大學は實に全國を通じて本學のみである。夫故、歴代の大學當局者は此問題に苦心して來た。常岡學長は特に學生生徒の保健問題に關心を持ち、體位向上保健問題に盡力した。府當局も本腰を上げ、希望條件附乍ら運動場設置の件府會を通過するに到つた。

時恰も、奈良電が沿線發展策として作つた寺田球場の經營が旨く行かず、放置せられてあつたが、森理事長は奈良電の常務取締役をしてゐる知人から奈良電は無償にて醫大に譲渡の意あることを伝えられ、大學當局や諸教授とも相談の上實地見分した處、設備、交通、環境等の立地條件よく、將來豫科の移轉すら可能と考えられて、大學當局も大いに乗り氣になつて、具體的交渉に入る事になり、常岡學長の如きは「運動場も今年中に出来る目途が立ちました」と新年宴會の席上にて披露した程である。時は丁度日支事變の進展の最中軍備擴張の折柄、突如として寺田球場附近に國際航空會社設立の計画が發表され、奈良電は學校に無償譲渡することに難色を示し、終に此の話は白紙に還つてしまつた。其後、奈良電は巨椋池の干拓地約一萬坪を格安に斡旋し、大學が土地を買収すれば運動場の設備は會社がすると申出たが、大學の出金は難しく成立するに到らず、一方學内より運動場要望の聲は益々高く、大學當局も各方面に援助の手を求めて奔走したところ、府下八幡町より町有地二萬五千坪を無償寄附してもよいとの話があつたが、其の町有地は石清水八幡宮の東、京阪電鐵の八幡驛より約二軒東南の所で、環境はさして悪くはないが、運動場の整備には相當多額の費用を要し、交通も不便な事として結局此話も立消え、多年の懸案たる運動場問題も、戰爭の惡化と共に默殺の運命に陥つて終つた。昭和十六年頃の事である。

戰爭の熾烈化に伴い、大學の態勢も國家の命令で大變化を見、遂に昭和十六年春から文部省より學園の戰時態勢強化を要請さるるに到り、學友會も臨戰態勢をとることを餘儀なくせられ、教職員、在學生を中心とする奉公會の設立となり、學徒報國隊の組織を見、卒業生のための學友會との二本建となつてしまつて、奉公會は敗戰と共に潰滅し、終戦後は學生自治會となり、學友會は昭和十六年秋頃から兵庫、三重、和歌山、廣島、鳥取各地に支部が出来、今日に及んでいる。

却説、昭和十六年六月、豫科教授箕浦忠愛、滿洲國及中華民國へ出張を命ぜられ、續いて翌七月には、教授越智眞逸、また滿洲國及中華民國へ出張を命ぜられた。

同じ七月、豫科教授兼主事佐々木宗要、依願本職並びに豫科主事を免ぜられ、代つて豫科教授榎本安三郎、豫科主事に補せられた。



榎本安三郎

豫科の學生主事は教授榎本安三郎兼任後、森島三郎、柴久光、二教授の兼任を経て、角田學長時代に、豫科教授北上四郎、學生主事兼豫科教授に補任せられて來たが、昭和十六年八月、豫科教授武田鐵五郎、學生主事北上四郎に代り學生主事兼豫科教授となつた。

同月、本學の學徒報國隊結成式が舉げられた。去る四月奉公會生れてより最初の具體的活動である。

十一月一日、創立第七十周年陸格二十周年記念祝典が舉行せられた。式は午前十時に始まり、學長式辭を述べ、續いて知事告辭、文部・厚生兩大臣の祝辭、府會議長・帝大總長・醫師會長・市長・卒業生代表等の祝辭あり。引き續き二十年以上の勤續者二十三名を表彰した。午後は二時より學友會改組後第一回の評議員會を開會、此席上、奉公會の説明、學友會改組の説明あり。種々質問討論の後、地方支部結成の決定を見、また、松永周三郎理事より、學友會京都支部からの「本學に女子醫科大學の設立を要望す」との緊急決議案の提出あり、是亦、可決せられた。夜には恒例の通俗講演會あり、教授梅原信正「癌腫」に就いて、同淺山忠愛は

「結核」について共に蘊蓄を傾け、平易に講じ滿場の聴衆に多大の感銘を與えた。翌二日夜、學友會主催の祝賀晚餐會を催し盛會を極めた。日頃險しき日々を過す折柄、此二日ばかりは和かな時をすごす事が出來た。

此月、助教授荒木正哉、教授に任ぜられ、病理學擔當。

同じ月、本科に於ても豫科に於けると同様に指導教授制を布く事になり、四力條より成る京都府立醫科大學指導規則が制定された。此制度は當分の間本科の第一學年第二學年にのみ適用せられ、初回、則昭和十六年度の指導教授は左の通り決定した。

第一學年 越智教授、後藤基幸教授、勝教授

第二學年 梅原教授、藤井教授、荒木教授

昭和十六年十二月八日、日米開戦、宣戰布告、第二次世界大戰となる。これより吾國は戦力第一義に、有らゆる資源を——人的にも物的にも——動員して戦時機構に切りかえ、緒戦の勝利に盲信し、只管破滅の道を邁進して行つたのである。戦争の苛烈は學徒の勉學を沮み、明春三月の豫定の第十六回卒業式は三カ月繰上げることになつて、此月即ち十二月廿六日第十六回卒業式舉行、此日學士試験合格證書を授與せられたるもの七十八名。

同月建田恭一、助教授（解剖學）に任ぜらる。

昭和十七年は、本學經常豫算が初めて二百萬圓を突破した年である。陸格後第一年の大正十一年のそれが百二十萬圓臺にあつたに比し、二十年の歳月は、茲に、二百拾壹萬圓餘に伸展したのである。經理委員會の席上、常岡學長が「本學の豫算も漸く二百萬圓を突破した」と嬉し相に云つた一言は、筆者の耳に未だに残つてゐる。

苛烈なる戦争の要求は、遂に學徒の勉學研究に専念することを許さず、先ず在學年限の短縮となり、勤勞作業の強化となり、應召相次ぎ、病院の診療にも支障を生じ、最も甚しき時には、部長一人残された醫局が生じた程で、惡化に惡化を重ねて終末を遂げたのである。

在學年限の短縮は此昭和十七年より實施せられた。本科は原則として四年を保つたが、當時在學生は三年六カ月とし、豫科は二年六カ月とし、毎年の本科の入學期は十月となり、一學年は二學期とし、在學生に對しては夫々過渡的措施が講ぜられた。

昭和十七年三月、文學士臼井竹次郎、豫科教授に任ぜられ獨逸語擔當、同じ月、京都府立第一高等女學校教授理學士森譽四郎、豫科教授に任ぜられ數學擔當、又、豫科講師佐々木宗要、同大庭米治郎、囑託を解かれた。四月、理學



登 村 中

博士塘仁三、豫科講師囑託せられた。五月、豫科教授柴久光、願に依り退職と共に豫科講師を囑託せられ、代つて豫科講師塘仁三、豫科教授となつて物理學擔當。同月、豫科教授佐伯梅友、東京文理科大学に轉任、後任に立命館大學豫科教授文學士淺田善二郎、豫科教授に任ぜられ國語を擔當。七月、助教授角本永一、興亞學生勤勞報國隊滿洲建設勤勞奉仕隊特技隊醫療隊長を囑託せられて渡滿した。

八月、學長兼教授常岡良三、定年につき願に依り學長並教授を免ぜられ、教授中村登、京都府立醫科大學長兼教授に任ぜられた。同時に、教授藤原謙造は附屬醫院長を辭し、教授望月成

人、附屬醫院長となる。

九月、藥局長兼豫科教授森益藏、依願本職並兼職を免ぜられ、藥劑手梅田良三、藥局長に補せられた。十月、高木敬一、助教授（小兒科）に任ぜらる。

九月六日、幹事中西喜一郎病死す。

十一月一日、恒例の創立記念祝典の夜の通俗講演會は、今年にて會を重ねる事八回、今回は、教授齋藤二郎「小兒の保健」に就いて述べれば、教授山田一夫は「結婚適齡期」について蘊蓄を傾け満場を魅了した。市民を啓發し多大の好評を博したる此市民講座も、戦時情勢の逼迫、終戦に續いての混亂動搖裡に繼續することが出来なくなつたのは遺憾の極みである。此八回の間に講演した人々は（第一回、第七回既述）教授越智眞逸、同望月成人（第二回、昭和八年）、同中村登、同勝義孝（第三回、昭和十年）、同本永七三郎、助教授松岡龍三郎（第四回、昭和十一年）、教授後藤五郎、講師河村謙二（第五回、昭和十三年）、教授越智眞逸、助教授加藤明敏（第六回、昭和十五年）等であつた。

昭和十七年も押詰つた十二月、助教授加藤明敏、教授に任ぜられ微生物學擔當。

在學年限短縮せられた結果、卒業式は昭和十七年より毎年九月に舉行せらるる事になり、昭和廿三年迄此狀態が續いた。昭和十七年九月に舉げられた第十七回卒業式に於て、學士試験合格證書を授與せられたる者六十名であつた。

昭和十八年一月、小澤俊次、助教授（藥物學）に任ぜらる。藤井桑治郎、幹事に任ぜられ、又教授淺山忠愛、定年退職、同時に附屬醫院第一内科部長を免ぜられ、第二内科部長飯塚直彦、第一内科部長となる。助教授細田孟が第二内科部長代理を命ぜられたが、三月、教授に任ぜられて第二内科部長となる。

同月十三日、教授加藤明敏、病死す。教授赤野六郎、微生物學教授缺員中同教室管理を命ぜらる。

同月、長者尙徳、助教授（内科學）に任ぜられ、助教授鈴木成美は皮膚泌尿器科副部長を、同志多半三郎は産婦人科副部長を命ぜられた。豫科講師淺山哲二（地質礦物）、山口友吉（法制經濟）、柴久光等講師を免ぜられ、理學士關軍治、豫科講師を囑託せらる。

同じ月、去る昭和十六年四月移轉改築工事に着手した看護婦寄宿舎は、一期・二期工事を完了して竣工した。敷地七一・九一坪の地に、延一〇五八・二坪に及ぶ木造地階一階二階の建築、ドライ・エリアを備えている。

四月、豫科化學教室増改築始る。同月、教授梅原信正、定年退職。

五月、教授後藤基幸、教授兼學生主事藤井猪十郎病氣引籠中、藥物學教室管理及學生主事事務取扱を命ぜられた。

同月、助教授鈴木成美、皮膚泌尿器科副部長より轉じて、微生物學教室勤務を命ぜられ、丸本晋、新たに助教授に任ぜられて第二内科副部長を命ぜらる。

六月、教授藤井猪十郎、願に依り學生主事兼任を免ぜられ、教授後藤五郎、代つて學生主事に兼任せられた。同月、助教授今津九右衛門休職を命ぜられ、第二外科副部長を免ぜらる。

七月、學生主事兼豫科教授武田鐵五郎、豫科教授兼學生主事に任ぜられ、滋賀縣八日市中學校教諭厨清雄、京都府立醫科大學學生主事に任補せらる。八月、教授赤野六郎、滿洲國へ出張を命ぜられ、同荒木正哉は滿洲國及中華民國へ出張を命ぜられた。

九月、第十八回卒業式を舉行、此日七十四名が學士試験合格證書を受領した。

同月、助教授高木敬一、依願退職。

十一月、小川瑳五郎、島田吉三郎、角田隆、常岡良三、淺山忠愛、梅原信正は本學名譽教授に推薦せられた。

同月、助教授鈴木成美、教授に任ぜられ微生物學を擔當し、教授赤野六郎は微生物教室管理を免ぜられた。同じ月、中村恒男、助教授（小兒科學）に任ぜらる。

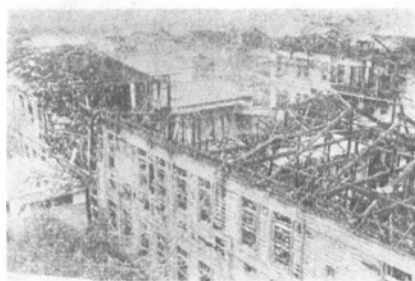


院 分 見 伏

昭和十六年の本學創立七十周年記念祝典に際し、學友會評議員會に於て、京都支部から提出せられて議決された緊急動議に端を發した女子醫科大學設置の件は、大學に於ても直に其の實現を計つて種々考究努力中のところ、時局の急迫は一日も早く多數の醫師を必要とする段階に入り、一時、醫育統一の方針の下に廢止せられたる醫學專門學校が、國內情勢の必要の前に全國諸處に復活するに到つたので、國家の要望に應えて、修業年限四年の附屬女子専門部の設置を企画し、敷地には、先きに學友會館建設のため看護婦寄宿舎を移轉せしめたる儘、時局の緊迫資財難のため建設不可能となり其儘空地となつていた元看護婦寄宿舎及其隣接地を校舎敷地に、實習實驗には本學の設備を、臨床實習には、先きに決定せる財團法人伏見病院の寄附を受けてこれに充て、校舎校地の整備には、某氏より特に女子醫專設置のため卅五萬圓の寄附あり、茲に附屬女子醫學専門部設置の成算立ち、諸般の手續を了し豫算措置も終りて、昭和十九年四月より實現することになつたのである。幸に十九年二月二十二日附京專二七號を以て文部省より認可を得、直に生徒募集をした。險しき時局の裡にも、

吾學園は一脈の光を仰いで昭和十九年を迎えたのである。

昭和十九年一月、書記水野定藏以下六名、財団法人伏見病院本學委管に伴う接收委員を命ぜられ、同月、金田弘、助教授に任ぜられ理學的診療科副部長を命ぜられた。三月、幹事藤井彥治郎、京都府立醫科大學科學動員委員會幹事を命ぜらる。



燒 跡

同月、末川悍、山田義雄、佐野多郎、濱孝雄、西田貢、講師に任ぜられ、四月一日より夫々伏見分院醫長を命ぜられた。四月、伏見分院外科醫長阿部四郎、伏見分院長を命ぜられた。

愈々附屬女子専門部開校、第一回の入學者八十名、教授鈴木成美、豫科教授淺田善二郎、同森譽四郎、同東儀正、同白井竹次郎、同武田鐵五郎、同箕浦忠愛、同塘仁三、藥局長梅田良三、足立興一、小森繁、助教授田中秋三、教授後藤基幸等、女子専門部講師を囑託せられた。

同月廿四日、午後八時卅分頃、衛生學教室、微生物學教室の小使室より出火し、基礎學教室は、解剖學、病理學の二教室を除き、衛生學、微生物學、生理學、醫化學、藥物學の五教室烏有に歸した。科學的智識の缺けている小使（微生物學教室所屬）が、アルコール不正使用の跡を糊塗せんとして此大事を惹き起したものの。消火、燒跡清掃除等に、學生、生徒、看護婦等の協力活動は誠に目覺しいものがあつた。各方面より多くの見舞を寄せられ、同情篤き寄附もあつた。全學自肅自戒、病中の中村學長は、

病床を學内に移して自ら陣頭指揮に立つて、學復興に立ち上つた。罹災教室の研究室は、取り敢ず藥物學教室は皮膚科の一部、生理學教室は病理學教室の一部、醫化學教室は實習室、衛生學教室は解剖學教室の一部を借用する事になった。女專の授業は府一高女に於ける講義のみとし、復興委員會を組織し、早急に復舊を計る事に努力した。

六月、學友會館の實現を見たる事既述の通りである。同月、教授勝義孝、教授赤野六郎病氣引籠中、衛生學教室管理を命ぜらる。同月、京都帝國大學醫學部講師緒方洪平、本學講師（衛生學）を囑託せらる。

七月、講師河村謙二、木口直二、助教授（外科學）に任ぜられ、河村助教授は第二外科副部長を命ぜられた。

七月八日、學長兼教授中村登、附屬女子専門部長に就任。同月、助教授木口直二は伏見分院勤務を命ぜられ、教授後藤基幸、同鈴木成美は共に女專教授兼任、助教授田中秋三は女專教授兼生徒主事に任命、藥局長梅田良三は女專教授兼藥局長事務取扱に、講師足立興一は女專教授に任ぜられた。また、伏見分院長阿部四郎は講師を辭任、分院長を免ぜられ、講師末川悍之に代る。大學に於ては、助教授松岡龍三郎、地方技師に轉出した。

九月、文部省より九月二十日以後に於て卒業式を行う様通牒ありたるも、學生の大部分は、陸海軍醫學校に於て集合教育を受けつゝありて歸京を許されざる状態により、第十九回卒業式は行わざる事とし、九月廿一日を以て卒業とした。第十九回卒業と認定せられて學士試験合格證書を授與せられたる者六十一名。

同月、女專教授梅田良三、藥局長兼女專教授となる。十月、教授越智眞逸、助教授小澤俊次、女專講師を囑託せらる。

十一月小谷庄四郎、助教授に任ぜられ、神經精神科副部長を命ぜらる。

同月十六日、教授赤野六郎死去した。また、學生主事厨清雄、依願退職。

サイパンの失陥以來、完全に敵の空襲下におかれた吾國は、外、戰況益々非に、内、國民の日々の食糧すら彌々細りゆく苦難の裡に昭和十九年を送り、運命の年昭和廿年を迎う。大東亞戰爭と呼號し太平洋戰爭と叫んだ吾國に頓着なく、第二次世界戰爭は着々として其の最終戦局を展開した年に入つたのである。

昭和廿年二月、中村四十吉、助教授（病理學）に任ぜらる。

同年、教授越智眞逸は女專教授兼任となり、女專講師末川悍、佐野多郎、三宅廉、濱孝雄、西田貢等女專教授に任命せられ、女專教授足立興一、大學講師を兼嘱せられた。

三月八日午前六時頃、花園分院本館二階西南隅邊より出火、本館床坪二〇一坪を全焼して鎮火した。原因は漏電と推定せらる。幸に入院患者に異常なく、診療は西側の内科・外科の診察場附近、其他賣店等を換用して繼續する事が出来た。當日は豫科生徒百名が、宇治火藥庫に勤勞動員のため食堂に集合して居つたので、直に消防署、警防團と協力活躍した結果、約一時間で消火する事が出来たのである。

日本全土が戦場となりたる今日、本學に於てもかねて大學及附屬醫院の防空對策を練つて來たのであるが、三月十日の大阪の大空襲は、愈々事態の急迫せる事を教えたので、直に貴重な圖書、文献、標本の疎開、木造建築物の除去等に着手した。病院では木造の一・二・三號舎は取拂われ、去歳の火災に焼残つた病理學教室、明治卅九年建造せられて以來、幾多の輝かしき業績を生んだ教室も無慘や取毀されて、研究室は、圖書館の閲覧室と京極國民學校へ分散、標本室も京極校に移つた。教室は本學と京極校に二分して、講義は本學、實習とデモンストラチオンは京極校で

と云う有様であつた。尤も終戦後は本學に引き揚げて、標本は中央圖書館の地下室、デモンストラチオンは舊銃器庫、實習は解剖學教室の組織實習室で、又、研究室の一部は院内食堂三階に移つた。微生物學教室、醫化學教室、生理學教室、藥物學教室、女子専門部等は、夫々、府一高女、府立盲學校、北白川國民學校等に疎開して、具に戰爭の苦難、敗戦の悲痛を體驗したのである。

四月十日、第二十回卒業生のため假卒業式を舉行した。時局の逼迫は九月を待つ事が出来なかつたのである。

尙、四月より、從來の一學年生、二學年生等の呼稱を、一回生、二回生等と改める事になつた。

四月、助教授産婦人科副部長志多半三郎は伏見分院産婦人科醫長、分院長事務取扱を命ぜられ、講師田原敏男、代つて産婦人科副部長となる。五月、助教授弓削經一、女專講師を囑託せらる。同月、教授荒木正哉、教授勝義孝に代り衛生學教室管理被命。助教授木口直二は伏見分院外科醫長を命ぜらる。

六月一日、教授兼女專教授越智眞逸は、學長兼教授兼女子専門部長中村登病氣缺勤中代理を命ぜられた。

同月、助教授中村文雄、女專講師囑託せられ、助教授今津九右衛門は休職満期にて自然退職となる。また、教授中川清、助教授小谷庄四郎、同金田弘、女專講師を囑託された。

七月廿五日、豫て病氣引籠中の學長兼教授兼女子専門部長中村登死去、廿九日學内葬を行う。教授越智眞逸、學長事務取扱を命ぜらる。同月、教授望月成人、齒科學教室、耳鼻咽喉科學教室の管理被命。

八月六日、廣島原子爆彈の攻撃を受く。九日、長崎、原子爆撃に遭う。

十五日、吾國無條件降伏して終戦、第二次世界大戰の砲火、茲に、やむ。前途の不安におびえ國內混亂の裡にも生

色あり。

同月、助教授中村文雄、耳鼻咽喉科部長心得を命ぜられ、豫科講師エルヴィン・ヤーン、囑託を解かれた。慰勞金三百圓贈與。

九月二日、ミズイリー艦上、無條件降伏の文書の署名終りて、茲に、吾國獨立を失う。

第四期 終 戰 以 後

明治革命以來、内外幾多の苦難を突破しつゝ、駭々として向上發展の一途を辿ること七十有餘年、極東の一小國より何時の間にか五強國の一となり三大國の一にのし上つた「大日本帝國」は、忽ち無等國に陥落して唯の「日本國」となり、天皇は神性を失つて地上に立ち、主權在民の世となり民主日本の新しき國造りが始つた。謂う所の二千六百年の傳統の崩壞が齎した混迷の裡に吾學園の歩んだ跡をたずねて見よう。

昭和二十年九月、去る四月假卒業式を舉行せし第二十回卒業式を改めて、此月二十八日に本卒業式を行う。今回學士試験合格證書を授與せられたる者七十一名。



逸 眞 智 越

授後藤基幸之に代る。

同月、教授兼女專教授越智眞逸、學長兼女子専門部長事務取扱を免ぜられ、學長兼教授兼女子専門部長に任ぜられた。同じ月、豫科教授兼學生主事武田鐵五郎、兼職を免ぜられ、豫科教授森譽四郎、兼學生主事に任ぜらる。大學書記水野重一、學生主事に任ぜられた。

十月、女專教授佐野多郎、伏見分院眼科醫長を免ぜられ、助教授兼女專講師弓削經一、代つて伏見分院眼科醫長を命ぜられた。十一月、女專教授末川悍、依願退職し、助教授志多半三郎、女專教授兼助教授となる。

終戦時の混亂に虚脱状態にあつた國民は、漸く虚脱状態から脱けて來ると、被占領下に新しき國造り——民主運動が抬頭し、古きを破り新しきを求める浪漫的精神が國內に漲り、民主日本は其の疾風怒濤時代に這入つた。過渡期の常として到る處に混亂が見られ、生れ出づる惱みは廿年末期からいろ／＼の形で表われ、學生の同盟休校、教授排斥運動と云う様な形であらわれると同時に、民主化運動は勞働組合運動と結びついて従業員組合の誕生となり、二十一年中は殆ど組合運動の騷亂に暮れた觀さえある。

昭和廿年十一月、豫科の生徒大會を皮切りに、女專生徒大會が行われ、本科學生は廿八日學生大會を開いて、學生自治會の設立及右自治會内に共濟部の設置を承認することを要求し、厚生設備の完備、食糧供給に關する學校當局の援助、特別講義制の設立、出缺制度の撤廢、現在の講義法の改善、教務課の權限縮少、學校行政へ學生の參劃、教授會の公開、その過去の速記録の即時公開、本學の發展を沮止せる教授會の閑的存在の解消等の要求を決議し、決議文を學長に手交し十一月卅日迄に書面回答を要求した。翌廿九日夜、學生は改めて、前日の決議に、學長の辭職、後藤基幸教授の辭職、荒木正哉教授の反省要求の三項目を追加した。卅日正午、第一回の要求に對し、出缺制度の撤廢に

對しては、實習、ポリクリニクは當該教授の意向に由ることとして承認、教務課權限縮少、學校行政へ學生參加の件は、詳細に聴取懇談の上善處、過去の教授會速記録公開、教授會内派閥の存在の件は否認、其他は承認の回答をした處、學生側は之を不満とし第二回の決議の回答を要求。是に對し、學長は「可及的速に學生と會して、具體的事項につき協議することを切望する」旨の回答を十一月一日夕手交したところ、同夜學長宅に、學生側より出席の電話要請ありたるも、手違にて學長に通ぜず。學生は二日より自由行動に入つた。一方、學友會京都支部では學生の行動を支持する旨の決議があるなど紛糾したが、結局、學長、後藤基幸教授の辭職、荒木正哉教授の反省の線にて此問題は解決した。其後、助教授講師團、助手副手團、事務雇傭人團、看護婦團等續々として大會を持ち、愛學の熱意を披瀝しつゝ活潑なる民主化運動を展開した。



孝 義 勝

却說、昭和二十年末には、講師文學士習田達夫、女專教授となり、教授兼女專教授後藤基幸、女專教務主任を被免、伏見分院長事務取扱志多半三郎は伏見分院長を命ぜられた。

斯くて多事多難の昭和廿一年を迎う。

一月、女專教授兼生徒主事田中秋三、兼職を免ぜられ、助教授金田弘、依願退職した。

二月、學長兼教授兼女子專門部長越智眞逸、願に依り學長兼女子專門部長を免ぜられ教授專任となり、教授勝義孝、學長兼教授兼女子專門部長に任命された。同月、女專教授佐野多郎死

亡。教授兼女專教授後藤基幸、依願退職し、教授藤井猪十郎、醫化學教室管理を命ぜらる。

昭和廿年末より、學内輿論の適正なる反映機關として京都府立醫科大學協議會設置の聲が揚り、民主化運動の必要事として此二月結實するに到つた。本會は學内諸團體、即ち教授團(2)、豫科教授團(2)、助教授講師團(3)、助手副手團(5)、事務職員團(5)、雇傭人團(5)、學生自治團(5)、豫科生徒自治團(4)、女專生徒自治團(4)、看護婦自治團(5)(數字は委員數)より選出の委員を以て組織し、各團體間の連絡、輿論の聯携を計るのが目的で、學長の諮問、各團體の提案を協議し、決議及要求を行わないのが立前で、毎月第一、第三水曜日午後三―五時會合した。當初は問題も多かつたので定期的に開會していたが、後には問題も少くなり、構成團體も豫科、女專の廢止、甲種看護婦學院の新設もあつたりして異動を見、規則にも變更があつて、要するに客觀的情勢に順應して開かれている。民主化運動に貢献した點は大きい。

三月、文部省通牒第五二號により、學生主事、學生主事補は此月限廢官となる事になつた。由つて教授後藤五郎、豫科教授森譽四郎の學生主事兼任は免ぜられ、學生主事水野重一は大學幹事に補せられた。

同月、助教授中村文雄、教授となり耳鼻咽喉科學擔當、耳鼻咽喉科部長を命ぜられ、同時に教授望月成人の同教室管理を解かれた。又、講師野中彌一、助教授(皮膚泌尿器科學)に任ぜらる。

産婆看護婦教習所は、三月卅一日限り廢止となり、四月一日、新たに助産婦科看護婦科の二科より成る厚生女學部が設置された。これにより卒業生は助産婦看護婦の免許の外、高等女學校卒業の資格を得る事になつた。部長は病院長之を兼ねた。

昭和二十一年四月一日、勅令第二二三號により公立學校職員は本官となり、辭令を用いず夫々文部教官、文部技官、文部事務官に任官補職勤務發令せられた。同月、助教授野中彌一、皮膚泌尿器科副部長を命ぜらる。

五月、大學教員適格審査委員會設置せられて大學教員の適格審査が始り、新時代の觀點より其の思想及び過去に於ける所業を追求し、其適不適を審査する事になつた。豫科及女專は、近畿一府六縣の高等學校專門學校教員適格審査委員會に於て審査せられた。

同月、病院に從業員組合が結成され、當初約八十の組合員を擁し、夏の飢餓突破資金の要求を皮切りに活潑なる活動を開始した。其の中、外廓團體或は外部の從業員組合が應援し、一團となつて學長を罐詰したり、労働歌を高唱し乍ら病院の廊下を土足で暴れ廻つたり、發電所、電話交換室を占據したり、病院の烟突に赤旗を立てたりするなど労働組合運動本來の粹を逸脱した、破壊的な鬭争と云う面が著しくなつて來たので、患者は減少し、赤の病院にはおけぬとて親に連れ歸らるゝ看護婦もあると云う有様で、憂うべき様相を呈して來たので、病院、大學の前途を思う同憂の人々立つて、第二組合として職員組合を組織し穩健なる組合運動を開始した。此穩健な民主化運動は人心を捕捉し、職員組合員は益々増加して全職員の四分の三を包括するに到り、昭和廿一年十月には、大學と労働協約を締結するに到つた。之に反し、從業員組合員は漸減して約三十名程となつていた。職員組合は、今日なお、儼として存在し、組合本來の使命の達成に努力を重ねているが、從業員組合の方は其後自然消滅の道を辿つた。

九月、第廿一回卒業式舉行。今回學士試験合格證書を受領したる者八十五名。

さきに占領軍最高司令部の指令により、醫師は醫學教育修了後一カ年の實地修練を経て國家試験に合格したるもの

と定めたるにより、今回の卒業生は直に實地修練に入ることになった。其の期間一年は、今年に限り九月より明年三月末迄と短縮され、明廿二年四月の第二回國家試験を受ける事になった。第一回國家試験は今月實施されたが、これは外地引揚者又は齒科醫で醫學の補習を終えたもの等のためのもので、醫學校卒業者の受験は明年の第二回が實際上初回になる。

同じ九月、助教授弓削經一、女專教授兼任を命ぜらる。

昭和廿一年十一月三日、百三カ條より成る日本國憲法新に發布せられて、明二十二年五月三日施行と定められた。

十二月、講師緒方洪平、教授となり衛生學擔當、同藤田秋治、教授任官、生化學を擔當、仍て教授荒木正哉、同藤井猪十郎は、夫々、衛生學教室、醫化學教室の管理被免せられた。

昭和廿一年度以來開催された夏季醫學講座、市民醫學講座、交換教授（初回は阪大と）の講義等は多大の好評を博し期待を寄せられ、引續き昭和廿二年以後にも續行、醫學概論、遺傳學、寄生蟲學、溫泉學等に及んだ。

昭和廿二年一月、漆葉見龍、講師を囑託せられ幹事となり、助教授長者尙德、依願退職。

三月卅一日、教育基本法（法律第二五號）、學校教育法（同第二六號）其他一連の教育法規發布せられ、茲に、吾國の教育制度は一舉にして大改革を見るに到り、所謂六、三、三、四（醫學教育のみは、六、三、三、六）の教育制度となつたのである。但し舊制度の大學、高専校は在學生の卒業する迄存續を許される事となつた。

三月、元京城醫專教授片岡八束、女專講師委嘱。

四月、講師野田秀俊、教授に任ぜられ解剖學擔當。講師飯田文武、同横井勝朗、同今井晴一、同中島富雄、夫々、

耳鼻咽喉科、理療科、眼科、産婦人科の副部長を命ぜらる。助教授建田恭一（解剖學）依願免官。

六月、豫科教授下程勇吉、京都帝國大學文學部教授に轉任。助教授井尻萬太郎、官吏分限令第十一條第一項第四號に依り休職となり、京都帝國大學醫學部助教授美濃口玄、講師（齒科學）を囑託せらる。又、女專講師片岡八束、同月、女專教授に任ぜらる。

七月廿一日、文部省第一六號「從來の規定による醫學專門學校の修業年限は五ケ年とする……附則、昭和廿二年四月一日から適用する」により、女專は修業年限一カ年延長する事になった。教養課目の履修がふえたためである。女專は、學友會館が鴨堤荒神橋畔に實現以來空地となつた看護婦寄宿舎跡四一九坪の地に、昭和十八年度三四三・一三坪を約七萬七千圓にて、二十年度には三八九・一一坪を六萬八千圓を投じて南隣の地を買収、合計一一五一・二四坪の地に校舎を建築の豫定にて只管其の實現を待ちつゝ、戦時疎開以來盲學校の一部と本學と伏見分院——故學長中村登及當時の伏見病院院長藤原謙造の盡力により、財團法人伏見病院理事長中野種一郎との談合の結果本學に寄附せられて伏見分院となりたるもの、一部改修を加えた——と三方に分れて授業していたが、終戦後の資金、資財難に獨立の校舎の實現を見ざる内に、學制の改革となつて廢校の餘儀なきに到つたのである。

八月、女專教授習田達夫、豫科教授に任ぜられ修身、英語を擔當。

九月、第廿二回卒業式舉行、一〇三名に學士試験合格證書が授與された。同月、教授兼女專教授越智眞逸、定年退職。兵庫縣立醫大兼醫專教授吉村壽人、本學教授に任ぜられ生理學擔當。

十月、教授中川清、依願退職。女專教授片岡八束、本學教授となり皮膚泌尿器科部長を命ぜらる。助教授兼女專教

授弓削經一、教授兼女專教授に任ぜられた。十一月、女專教授濱孝雄、依願退職し、竹澤德敬、伏見分院診療事務を囑託せられ耳鼻咽喉科醫長を命ぜらる。

十二月、教授藤原謙造、厚生技官に轉じ、舞鶴國立病院長となつた。

之より先き、昭和廿年終戦になりて不用となりたる陸海軍の諸設備の拂下げ始るや、本學には舞鶴國立病院、高野國立病院、騎兵第五聯隊跡などが割てられたが、改修並に諸設備に要する資金難のため後二者は遂に放棄し、舞鶴國立病院に援助の主力を注ぎ、初め教授飯塚直彦、院長となりて協力したるも、専任の院長を置く事となりたるを以て、藤原謙造の赴任となつたものである。藤原謙造の轉出に伴い、教授弓削經一、代つて眼科部長となる。同じ月、幹事漆葉見龍、幹事長に就任した。

昭和廿三年は二講座の新設と二教授の新任とを以て明けた。一月、助教授川井銀之助、教授に任ぜられ胃腸科學擔當、助教授來須正男、教授に任ぜられて、新たに外科より獨立せる新講座、整形外科學擔當、生物理化學講座新設せられ、勝義孝、解剖學より轉じて之を擔當す。

同月、講師増田正典、胃腸科副部長を命ぜらる。二月、助教授山田博、教授に任ぜられ、勝義孝の後をうけて解剖學を擔當。

三月、去歲五月死去したる豫科教授塘仁一の後をうけて講師を委嘱せられいたる、理學博士杉原雅、豫科教授に任ぜられ、竹澤德敬、女專教授新任。

四月、教授望月成人、附屬醫院長を免ぜられ、教授飯塚直彦、院長となる。同月、厚生技官舞鶴病院長藤原謙造、

文部教官兼任、本學教授に兼補された。五月には望月教授、齒科學教室管理を免ぜられ、又、去る三月伏見分院眼科醫長を命ぜられた上野弘、女專教授に任ぜらる。教授弓削經一は兼女專教授を免ぜられた。六月に入り、去る三月講師委囑、伏見分院皮膚泌尿器科醫長を命ぜられた小田完五、女專教授に新任、片岡八束に代つた。七月に入り、さきに助教授井尻萬太郎休職に伴い、實際に齒科教室運営に當つていた講師美濃口玄、講師を解かれ、講師竹田三郎、後をうけて齒科部長代理となる。

八月、新院長飯塚直彦、厚生女學部長を兼ね、齋藤二郎は同看護婦科長を、山田一夫は同助産婦科長を命ぜらる。

九月、第廿三回卒業式舉行、今回の學士試験合格證書受領者一〇八名。同月、能勢善嗣（生化學）、錫谷徹（法醫學）助教授に任ぜられた。又、厚生技官國立舞鶴病院院長兼文部教官京都府立醫科大學教授藤原謙造は兼任を免ぜられ兼職を解かれた（定年）。

十月、曩に生物理化學教室の新設の際、共に其設置が決定した醫動物學教室は、愈々、開講、前京城帝國大學教授理學博士小林晴治郎を迎えて講師を委囑。十一月に入り、齒科部長代理・講師竹田三郎、齒科部長を命ぜられた。

同じ月、曩に副手制度廢止に伴い、臨時職員として任用されていた臨時職員副手は、本年三月末日迄、臨時職員任用調査審議の結果否認せられた數者を除き、延長される事になつた事が發表された。

今年度醫師國家試験委員會を命ぜられたる本學教授では、春期に鈴木成美及藤井猪十郎あり、秋期に飯塚直彦がある。

十二月、越智眞逸及島田吉三郎、本學名譽教授の稱號を與えられた。

昭和廿四年に入り、二月、教授來須正男、整形外科部長を命ぜられた。

終戦後直に修業年限三年に復舊した豫科修了生を迎えて教育した第廿四回卒業式は、舊の如く三月に舉行せられた。今回學士試験合格證書を授與せられた者一〇九名。又、同日本科卒業式後、女子専門部第一回卒業式を舉行了た。卒業生六十五名。

豫て看護婦助産婦保健婦等の制度改革により、夫々の教育機關を修業後國家試験を受けなければならぬ事になり、本學に於ても、大學程度の甲種看護婦學院（修業年限三年）を設置して甲種看護婦を養成する事になり、従つて、去る昭和廿一年四月から開設した厚生女學部は、在校生の卒業後は廢止の止むなきに到つた。四月一日、甲種看護婦學院開校、入學者十八名、附屬醫院長飯塚直彦、同學院長に就任、山田一、同學院教授に任ぜられ、同時に本學教授、助教授、豫科教授等に講師を委嘱した。同月末、附屬醫院長飯塚直彦、院長、甲種看護婦學院長、厚生女學部長を辭し、教授齋藤二郎之に代つた。

六月、助教授井尻萬太郎、休職満期となり自然退職す。

臨時職員制度の廢止に伴い、臨時職員副手は此月一日を以て全部離職、新に研修員制度が出來て一年の期間を以て志願する事が出来る様になつた。之は、結局、實質上は大した變革ではなかつたけれども、制度上大きな變動で當時影響する處多く、助手副手會などで大問題として取上げられたものであつたが、被占領國の制約下止むを得ぬ事であつた。

八月、豫科教授臼井竹次郎、京都大學助教授に轉任、九月より翌廿五年三月迄豫科講師を囑託された。

十一月、梅田良三、鈴木成美、田中秋三等女專教授の兼任を免ぜられた。

同月九日、附屬女子専門部教授會開催の時、本科三回生福田彌一、内藤三樹郎及び二回生平井正也、田阪正利、門脇一郎、谷澤三郎、木村昭、上田好治、傍聴のため入場した。本教授會は在來非公開であつたが、此時、足立、竹澤兩教授より公開せよとの提案あり、採決の結果非公開の再確認を見たるを以て、勝部長、水野教務課長より退去を要求せるも應ぜず、遂に教授會は流會となつた。越えて十五日、本學教授會に於て、去る九日の女專教授會流會の因をなした前記八名を學則第三四條によつて放學する事に決定した。但、十一月十九日迄に退學願を提出する者は退學を認める（田阪の場合は廿一日迄）と云う猶豫期間を附した。田阪、門脇の兩人は猶豫期間内に退學したが、他の六名は遂に放學せられた。「考える葦」に十分なる考ふる時を與えず、時勢の風に搖げる「葦」を一舉に切除したる果斷の處置は、其の究極の目標は謬りなく、是認せらるゝと言え、眞理の探究の殿堂であると共に人の子の教育の聖堂たる大學が、時つ風に搖ぐ「考ふる葦」をモルモット扱ひした。人の子はモルモットに非ずなどと、教授會の採れる手段に關し内外に批判の聲が揚り、刈られた葦も大風に揺れて、後に紛糾の糸をひいた。

同月、助教授野中彌一、女專教授足立興一、同竹澤德敬は、地方自治法附則第五條により官吏分限令第十一條第四號を準用して休職を命ぜられ、技手赤塚豊、看護婦長竹中幸も同時に休職を命ぜられた。

昭和廿五年に入り、年頭、助教授陣の整備あり、則ち一月、新に横井勝朗（理療科）、竹田三郎（齒科）、飯田文武（耳鼻咽喉科）、今井晴一（眼科）、増田正典（胃腸科）、保田岩夫（整形外科）、名取美代治（第一外科）、菅沼惇（微生物學）、舟木廣（生物物理化學）、井上五郎（生理學）、米澤猛（病理學）等多數が助教授に任ぜられ、又、女專教

授小田完五も助教授（皮膚泌尿器科學）に任ぜられた。

昨二十四年十一月放學せられた六名は、其後京都地方裁判所に放學處分取消の假處分を申請し、年内（廿四年十二月十三日）には第一回の辯論もあつたのであるが、今昭和廿五年一月三十日、放學處分取消の本訴に及んだ。

二月、講師徳田源市、産婦人科副部長を命ぜらる。

三月、第廿五回卒業式舉行、學士試験合格證書を授與せられたる者五十一名。豫科の修業年限復舊のため修了生のなかりし年の、主に陸海軍學校よりの入學者の卒業である。同日本科卒業式終了後、女子専門部第二回卒業式を行う。卒業生四十七名。

同月、豫科教授北上四郎、同森饗四郎、夫々、熊本縣立女子醫科大學教授、大阪學藝大學教授に轉任し、杉原雅及同淺田善二郎は、夫々西京大學教授、同大學助教授に轉任した。尙、兩氏は本學豫科教授を兼任。

四月一日、法第一號を以て、公立大學の文部事務官は地方公務員と身分が變り、在來の職を保有し事務職員となつた。公立大學の文部教官の方は、既に昨廿四年一月十二日に、法第一號によつて凡て地方公立學校教員となつてゐる。是で吾學園の全公務員は京都府公立學校教員及京都府事務職員となつた。

同月、教授齋藤二郎、附屬醫院長及甲種看護婦學院長を辭し、教授細田孟、之に代る。

五月、教授飯塚直彦、定年退職し、助教授館石叔、第一内科部長代理を命ぜられた。四月新任せられた計りの助教授名取三代治、此月病死した。又、同じ月、豫科教授宮田一、京都府事務職員に兼任せられ本學教務課兼務を命ぜらる。

六月、曩に女専校舍建築のため豫定したる西構（舊看護婦寄宿舎跡及買收地）に、昭和十九年の火災後未だ復舊を見ず、不便の裡に研究講義を續けて來た生理學、衛生學、藥理學の三教室を此處に復舊する事になり、豫て建築中の



西 構

處六月竣工した。木造二階建二棟、平屋一棟より成り、建坪三〇四・六七五、延坪四六七・九五に及び南側の二階建一棟に藥理學・衛生學の二教室、西側の二階建一棟に生理學教室が入り、衛生・藥理二教室前の平屋は研究室・實習室に宛てられている。工費八三五萬圓を要した。

七月、去る一月放學生より京都地方裁判所に提訴せられる放學處分取消の裁判は、其後數回の辯論開廷の後、此月十九日「放學處分は取消す」の判決があつて本學の敗訴となつた。之に對し本學は廿七日大阪高等裁判所に控訴した。

同月、豫科教授習田達夫、九州大學助教授に轉任。

八月、角田隆、藤原謙造は京都府立醫科大學名譽教授の稱號を授與せられ、十月には、小川瑳五郎、淺山忠愛、中川清、飯塚直彦、亦、京都府立醫科大學名譽教授の稱號を授與された。

十一月、さきに第一審に於て勝訴したる放學生、福田、平井、木村、上田等は聽講のため強引に登學し、之に同調の學生數者と共に講義を妨害し時に不能に陥れたる事、廿一日より廿八日迄に十一回、廿二時間に及ぶ。制止の職員中に負傷者さえ出た騒ぎであつた。遂に卅日の教授會に於て、同調したる學生

の處分が議せられ、放學二名、無期停學三名、戒飭二名の處分があつた。また、昭和廿年末の學生大會の決議に應じて、人事に關する件以外公開せられて來た教授會も、今後非公開となつた。一方、放學生等は昭和廿五年十一月廿八日、大阪高等裁判所に放學處分執行停止命令の申請書を提出した。之に對し昭和廿六年一月六日、總理大臣吉田茂より異議書が提出されて、放學處分執行停止命令の申請は却下された。此の總理大臣の異議書は、是がその第一號との事である。

又、前記學生大會の要求決議以來承認されてきた學生自治會も、其の後逸軌の行動多く内部の運営上にも、委員中に會員の問責に遭う者が出たり、一方、大學は外廓團體の人間の入つてゐる自治會は相手にせずの態度をとるに到り、自然消滅の形となり、之に代る學生の意氣の捌け口は運動總部が出来て、學内の親睦、體育、福利等に活躍、對外的には慈惠醫大と兩度にわたり、ゆきつ迎えつの對抗競技を行つたりした。

十二月十二日、多年本學のために、多難な時期に實直に貢獻した幹事藤井桑治郎死亡。

昭和廿六年は學制改革に伴ひ豫科及附屬女子専門部が、夫々廢止、廢校となつた年である。

三月、本科第廿六回、女專第三回卒業式舉行された。本科で今回學士試験合格證書を受領した者一〇七名。女專卒業生、これが最後の卒業生で四十九名。甲種看護婦學院も此月その第一回卒業生十三名を出した。

三十一日限り豫科は廢止、女專は廢校となり、豫て一部ずつ異動して來たが、廢止廢校と同時に、豫科教授榎本安三郎、同眞浦忠愛、同東儀正、同荒木新太郎、同武田鐵五郎、豫科教授兼事務職員宮田一、又、轉任後も豫科教授を兼任していた杉原雅、淺田善二郎等總べて退職した。女專教授志多半三郎、同木口直二、同西田貢、同三宅廉、同上

野弘、同小田完五、休職中の女專教授足立興一、同竹澤德敬等もすべて退職した。又厚生女學部も此月限り廢止となり助産婦科のみは暫く終了が延びる事となつた。

三月卅一日の告示により、四月一日より本學附屬醫院の名稱は京都府立醫科大學附屬病院、京都府立醫科大學附屬病院花園分院、京都府立醫科大學附屬伏見病院と改められた。

同月伏見の大倉氏より先代大倉恒吉追善供養のため百萬圓の寄附ありたるを以て、同氏と伏見病院との年來の關係を思い快く受け、伏見病院の病室、手術室、研究室等の改修に充て、同氏の厚意に副う事になつた。

四月に入つて廢校によつて、退職した志多、木口、西田、三宅、上野、小田等は、改めて本學助教授に專任又は新任され、附屬伏見病院の夫々の診療科部長に補せられ、新に助教授飯田文武は竹澤德敬に代つて耳鼻科部長となつた。志多半三郎は同院長事務取扱を命ぜられ、又、新に二年制の乙種看護婦學院が女專に代つて新設せられたるにつき、同學院長事務取扱をも兼ねた。同月、前豫科教授宮田一、本學講師を命ぜられ教務課兼務。

五月、教授齋藤二郎定年退職、直に助教授中村恒男が小兒科部長代理を命ぜられた。齋藤二郎は、六月、本學名譽教授の稱號を與えられた。同月、助教授井上五郎退職し、小南、小林、宮田の三講師、一級官を以て待遇せらる。

八月、一年數カ月に涉つて空席であつた内科學教授に、助教授館石叔就任して第一内科部長となり、助教授角本永一が同副部長となつた。

九月八日、北米桑港に於て平和條約締結せらる。

十月、兵昇、助教授に新任せられ伏見病院耳鼻科部長となり、飯田文武と交替した。

十一月、精神神経科教授兼花園分院長久保昱二郎、定年退職し、直ちに助教授小谷庄四郎、同科部長代理、分院長事務取扱を命ぜられた。同月、助教授中村恒男、教授に任ぜられ小兒科部長となり、又、伏見病院小兒科部長助教授



基礎教室

三宅廉、本學教授に新任、即日依願退職した。

去る一月起工した新基礎學教室は十二月十日に竣工した。四階建の頑丈なる鐵筋コンクリート建築で建二七四坪、延一二七・〇九坪の大建築、工費六八、五〇〇、〇〇〇圓、此處へ解剖學・病理學・法醫學・醫動物學の四教室が入った。

昭和廿七年に入り、さきに竣工した基礎學教室に、新に學界の寵兒となれる放射性同位元素の研究室が昨年末完成し、病理學助教授米澤猛が兼攝していたが、本年一月に入り同助教授は改めて同研究室管理代行者を命ぜられ、教授後藤五郎、同健康管理者を委嘱せられ、望月、後藤、來須、荒木、吉村各教授、米澤助教授、漆葉幹事長が同運営委員會委員

となり、新發足することとなつた。

同月露木萌、助教授に新任、三宅廉の後をうけて伏見病院小兒科部長となり、助教授第一内科副部長角本永一、教授に新任と同時に退職、國立舞鶴病院長に轉じた。二月には助教授小谷庄四郎、教授に任ぜられ神經精神科部長、花園分院長となつた。久保昱二郎は本學名譽教授となつた。

三月、本科第廿七回卒業式及び甲種看護婦學院第二回卒業式舉行。本科卒業して學士試験合格證書を授與せられたる者一二名、甲種看護婦學院の卒業生一四名。

四月廿八日、平和條約効力を發生し、吾國七年振に主權を回復し獨立國となる。

同月、甲種看護婦は「看護婦」、乙種看護婦は「准看護婦」と改稱せられ、從つて甲種看護婦學院は「看護婦學院」と、又、豫て伏見病院に設置されていた乙種看護婦學院は「准看護婦學院」と改稱されて、本院に看護婦學院と併設せらるる事になり、附屬病院長細田孟、同學院長を兼ね、助教授志多半三郎は同學院長事務取扱を免ぜられた。

昭和廿二年法律第二六號學校教育法第四條により、豫て新制大學設置認可申請中の處、昭和廿七年二月二十日附地管第三四號を以て認可あり、本學も愈々、新制大學に移行、舊制大學と併設される事となり、本年度より新學制により、他大學の教養課程修了者中より選抜して入學せしめる事となつた。志願者三五四名に達し、八十二名（うち女子十二名）が入學を許され、新制第一回の入學式は四月十日に舉行された。學長勝義孝は新制醫科大學長事務取扱を命ぜられ、勝義孝、藤田秋治、吉村壽人、野田秀俊、山田博等各教授、能勢善嗣、舟木廣等各助教授、宮田一講師等四月開講と共に、又、九月には小林晴治郎講師、何れも新制府立醫科大學の講師を囑託された。同月、教授藤井猪十郎定年退職し、助教授小澤俊次、藥理學教室管理を命ぜられ、又、講師森宗登、舊制大學の助教授に任ぜられ第一内科副部長となつた。藤井猪十郎は、六月、本學名譽教授となる。

五月、幹事長漆葉見龍、依願退職し、京都府總務部長伊吹貞治、其後を享けて新制醫科大學の事務局長となつて就任した。漆葉幹事長は在任中基礎教室及綜合講堂新築等の事業を残した。六月、豫て病臥中の教授横田浩吉、地方公

務員法第廿八條第二項第一號により休職を命ぜられた。

同月、新に微生物學教室に、之亦、最近學界の脚光を浴びて登場した電子顯微鏡を設備し、野田秀俊、山田博、荒本正哉、田中秋三、古村壽人、鈴木成美の各教授及菅沼惇助教授、同研究室運営委員會委員を命ぜられ、菅沼助教授は管理代行者となる。

學生自治會も本來の姿を回復し來れるを以て、八月には再確認された。

例年十月一日西本願寺に於て營まれる解剖體大法會は、戰爭中も杜絶する事なく執行、創立八十周年を迎える今廿七年十月一日には通算第五十二回の大法會を營んだ。祀られたる解剖體は通算八、五二に達している。

與えられたる紙面も最早乏しくなつたが、本學の獎學基金に就いて一言して置きたい。本學及附屬醫院職員、學生に對し學術研究又は學業獎勵其他獎學上必要と認めた時、夫を援助する目的で設置された京都府立醫科大學及附屬醫院獎學基金は、大正十年十月、當時の皇后陛下（貞明皇后）より御下賜の三〇〇圓に、京都府立醫科大學獎學會設立賛成者及同大學期成同盟會代表者より寄附せられたる國庫債券額面五〇〇圓、京都市債額面一、〇〇〇圓、現金一九、二八〇圓を加えたものを元金として、其後指定寄附を隨時此基金に繰入れ特別會計となつていた。此特別會計は昭和十八年限廢止されて、醫科大學及附屬醫院の一般會計に編入された（そのときの基金は一四、六五八・一七圓）。其後、終戦後の通貨大膨張の時勢になつては、所期の目的達成の活動は到底不可能となつたので、遂に昭和廿六年度限り此由緒ある獎學基金も解散の止むなきに到り、昭和廿七年三月十三日の京都府會に於て廢止の議決（第四十五號）あり、この基金は昭和廿七年度の醫科大學及附屬醫院特別會計豫算に繰入れられた。此時の基金は一九六、〇〇〇圓

であつた。

緒十一月一日は、本學創立八十周年記念日に當り、且、新制切替えの初年であるから、學友會とも提携し盛大なる祝典を企劃し、年頭より着々準備に着手し順調に進み、當日はほぼ完成したる綜合講堂——後、八十周年記念會館と改稱、廿七年五月卅日起工、十二月十日竣工、建三二六坪、延四〇八坪、千三百の坐席を有し、工費四〇、七六〇、四八一圓を要したる瀟洒な白色の鐵筋コンクリートの建築——を主として諸種の行事が行われ、記念事業への淨財の寄附も、目標額一千萬圓に對し祝典當日迄には約七百萬圓に達した。

今や與えられたる紙幅も超過したので、その記念行事を表に掲げて本稿を終らうと思う。

記念祝典行事

第一日（十一月一日）

創立記念學内運動會

鴨川グラウンド

第二日（十一月二日）

創立八十周年祝典

綜合講堂

永年勤績者表彰式

狂言「靱猿」 茂山社中

學内參觀

本學史料展示會

第四講堂

醫科大學時代

懇親會

鮎 鶴

第三日（十一月三日）

物故職員慰靈祭

綜合講堂

舞 樂「胡飲酒」

本學史料展示會

第四講堂

觀光 宇治・醍醐

參考文獻書目

- (1) 京都府立醫科大學一覽（昭和五年及同十六年版）
- (2) 京都府立醫學專門學校校友會雜誌 号外第一号（大正八年三月） 同第二号（同八年七月） 同第三号（同十年三月） 同第四号（同十一年三月）
- (3) 京都府立醫科大學校友會雜誌 第九一号（大正十一年四月）
- (4) 京都府立醫科大學學友會雜誌 第九二号（大正十一年十月） 同第九三号（同十二年四月）
- (5) 京都府立醫科大學雜誌 第九四号（同十二年九月） 同九五号（同十二年十二月） 同九六号（同十三年三月） 同九七号（同年六月） 同九八号（同年九月） 同九九号（同年十二月） 同第一〇〇号（同十四年六月） 同第一〇一号（同年十二月） 同第一〇二号（同十五年八月） 同第一〇三号（同年十二月）

- (6) 京都府立醫科大學雜誌 改卷第一卷第一号通卷第一〇四号(昭和二年五月)
 - (7) 京都府立醫科大學新聞 第一号(昭和三年四月十五日)——同第一八五号(昭和十九年三月廿三日)
 - (8) 「雪まつり」創刊号(昭和廿二年三月)
 - (9) 創立八十周年回顧座談會記錄 一(昭和廿七年十月三十一日) 同二(昭和廿八年三月十九日)
 - (10) 京都府立醫科大學豫科閉校記念寫眞帳附錄(昭和廿六年三月)
 - (11) 京都府會議事錄、同決議錄
 - (12) 京都府會史 大正時代資料(昭和廿七年七月) 同昭和時代資料(昭和廿九年三月)
 - (13) 京都府職員進退錄、不動産臺帳
- 大學一覽始め上記文献中の記事は、筆者の備忘録と照合しつゝ用いた。

追 白

暫くペンを執る事から遠ざかつていた私が、計らずも大任を仰付かつて一時は躊躇したのであるが、この八十年の歴史を有する由緒ある學園の存在すら知らずに京都へきて、縁あつて二十臺の若僧から半白の六十臺の今日に到る迄、此の學園で無事に過ぎして戴いた洪恩を思つて、危ぶみ乍ら御引受けした。果して、愚鈍遲筆、蝸牛の進行に大方諸賢の御焦燥御憂慮の程を、川井委員長、横田委員の熱烈な御鞭撻御援助の下に漸く脱稿した。此間、あまりに外史的に傾いたり、あまりに經理的見地に立ち過ぎたり、あまりに私見が入り過ぎたりして、稿を改むる事三回、四回目に出来上つたのが、此のどつちつかずの、隙間だらけの誠に御恥しいものである。決して自分でも之に満足はしていない。終戦以後と學友會の活動とをもつと詳記したかつたのであるが、紙幅の都合で、多くの資料を持ち乍ら果し得なかつた。他の機會を待ちたい。事件の取扱も、大なるものをあげて小さな物は省いた。これらの取扱については、讀者夫々

の立場から御不満もあらうと察せらるるが、筆者の主観を御赦し願いたい。

放射線教室、病理學教室、生理學教室、鑑石内科教室より寄せられたる資料には甚大なる恩恵を蒙つた。篤く御禮申上げる次第である。白井正一、山田重正兩博士の座談會や豫科閉校式に於ける談話は、筆者の記憶の裏付けとなり、伊良子清白に關しては山田博士によつて教えられる所多大なものがあつた。横田穰氏には公務多忙の裡を厭わず筆者を激勵し、資料の蒐集に遠近をも顧みず奔走援助せられ本稿の完成に多大の貢獻を到され、本稿の成れるは同氏の力と云つてもいい位である。又、資料の蒐集、閱覽、執筆中の雜用等に御援助を賜りたる、加藤常行、海老瀬捨雄氏、又水野重一、村瀬喜三郎氏等學生課諸員、圖書館の赤星軍次郎氏、學術研究會の大澤徹翁氏、學友會の住岡熊雄氏には特に多大の御援助を蒙つた。看護婦學院の庄司うた、准看護婦學院の山口清尾兩氏にも御援助を忝うした。茲に以上の議氏の御厚情御援助に對し衷心より感謝の意を表する次第である。